パンドラの箱～儚い記憶と契約の騎士（ナイト）～

星野ピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンドラの箱～儚い記憶と契約の騎士（ナイト）～

【Ｎコード】
Ｎ６６４５Ｐ

【作者名】
星野ピアス

【あらすじ】
小さいころ住んでいた町に戻ってきた奏希。そこで出会ったのは、黒い化け物と、自分の騎士だという四人の男だった！
前世と現世の間で揺れる神話物語

プロローグ（前書き）

何年も前から温めてきた小説です。
これをみて面白いと思っていただければ幸いです。

プロローグ

その光景は、暗闇の中、赤き蝶が飛ぶ様を想像させた。
森林が生い茂る闇の中で、存在しえない化け物が血を流しながらそこにいた。化け物の体はライオンのようだ。でも、それより一回り大きく、頭から角を生やしている。
その化け物を囲むようにして、三人の男達が暗闇に顔を隠し立っていた。そして、黒き物体の存在を驚くことなく見ている。

「ギェェェェェェ」

取り囲まれていた化け物が耳を塞ぎたくなるような叫びをあげる。
すると暗闇の中からその化け物と同じような黒い物体が現れる。
姿形は皆動物に似ているが、全てが黒に塗りつぶされたその体は、ただの生き物ではないということを語っている。
逆に囲まれるようになってしまった男達は、焦る様子もなく化け物等を見まわしていた。
そして、一人の男が一歩を踏み出した。
木の隙間から差し込んだ月の光が男を照らす。
その一瞬、目に焼きつく男の髪の赤が光を帯びた。
再び暗闇に紛れると、別の赤が飛び散った。

「ギャエエエエエ」

甲高い声を上げ、その場で暴れだす化け物に、男は容赦なく止めを刺した。先ほどまで鳴いていた化け物の声は、もうない。
それを見た他の男二人も、化け物の方へと駆け出す。黒い化け物はその男達と対峙するように声を上げて飛び出した。
男三人に対して化け物が二十数匹。この不利だと思われた戦いは、

意外な結末を迎えた。
男達の足元にはどす黒い血を流した黒い物体がごろごろ転がっている。勝利は男達が手にしたのだ。
男の一人がかすかに届く月の光に目を向けると、透き通った声を発した。
「今夜はずいぶんとコキュートスが騒いでいたな」
化け物のことだろうコキュートスという聞きなれない単語を耳にした男の一人が、会話をつなげた。
「きっと巫女姫が帰ってくるからですよ」
嬉しさのこもった愛らしい声が、闇の中に響く。光より闇が勝つこの場所では表情がよみとれなかったが、笑っていることは確かだ。
「俺達の巫女姫。一体どんな奴か楽しみじゃねーか」
赤き髪の男がそう言うと同時に、地面に転がっていた黒い物体が砂のようになめらかな灰に変化していく。
その灰は、風に飛ばされ夜空へとまってゆき、跡形もなく消えていった。
男達の姿も、もうその場にはなかった。

第一部　ハジマリノウタゲ

太陽の下で、キラキラキラキラ光る美しい海。生き生きとした黄緑の若葉たち。夏を感じさせてくれる蝉の鳴き声。そんな自然のあふれる風鈴町に、？姫宮（ひめみや）　奏希（かなき）？は来ていた。

まだ幼さを残す顔立ちに、真っ黒に塗りつぶされた艶のある髪は、彼女を少しばかり大人に見せていた。花柄のワンピースを着て、背中にはリュックを背負っている。

奏希はこの町に今日から住むことになっているのだ。

この風鈴町には十年前まで両親と共に住んでいた。だが、両親が不慮の事故で亡くなり、奏希はこの町を離れて祖父母の元で世話になっていたのだ。

風鈴町に親戚がいないことはなかった。だが、六歳の奏希には両親との思い出があるこの町にいるのは辛いことだろうと祖父母達は考え、引き取ってくれたのだ。

そんな優しい二人も、つい最近亡くなってしまった。奏希が友達と出かけている時だった。

二人は火事で亡くなったのだ。

居場所を無くした奏希は施設に送り込まれた。だが、そこでの生活は苦でしかなかった。心をひらける人が誰もいず、独りぼっちだった。

でも、そんな奏希の元に、一縷の光が差し込んだのだ。それは、風鈴町に住む五歳年上のいとこからの手紙だった。その手紙の内容は、一緒に住まないかというものだった。いとこの？姫宮　宇月（うづき）？は、奏希の記憶にとても沁みついている大好きな存在だった。

もちろん返事は決まっていた。だから今、奏希はこの場所にいるのだ。

奏希は手に持った地図を見たり辺りを見回したりを繰り返す。昔住んでいたとはいえ、幼い時のことはほとんど忘れている。それに、

十年もたったら構造も変わっているだろう。
町の中心部から抜け、緑の生い茂る人気の少ない方へと足を進める。高い山にいるので、見渡す景色は最高だ。海が見えて町の中心部が見えて緑も見えて……本当にきれいな町だ。
奏希は立ち止まり感嘆の声をだすと、その唇に笑みをきざんだ。
「風が気持ちいいな……」
懐かしい空気に肺を満たせた奏希は、再び歩き出す。
アスファルトの道には一台も車は通っていない。ただ蝉の鳴き声が響くだけだ。
奏希が額に汗を浮かびあがらせながら前へと歩いていると、頭に直接入り込んでくるような小さな声が聞こえた。それと同じくして、何かに見られている感覚を覚える。
「なに……？」
暑さでかく汗とは違う嫌な汗が流れる。引き止められるようにして立ち止った奏希は辺りを見回すが、何もいない。でも、確かに誰かに見られているのだ。
不吉な予感を感じ取った奏希は、地面に縫い付けられたように動かなかった足を必死に動かし走り出した。それでも奏希の中の不吉な予感は一向におさまらない。
「はぁはぁ」
息を切らせて奏希が前へと踏み出すたびに、その予感は増していく。
得体も知れない恐怖に呑み込まれると同時に、カーブを曲がると何かにぶつかった。
「！」
一瞬鼓動が跳ね上がる。
恐る恐る顔を上げると、そこには知った者の顔があった。
「宇月兄さん！」
そこにいたのはいとこの姫宮宇月だった。柔らかな栗毛の髪をなびかせ。驚いたよ

うに目を丸くさせていた。
「どうしたの。奏希？」
背の高いいとこの宇月が奏希の顔を覗く。
見知った顔を見た奏希はほっと息をついた。
いつの間にかあの不吉な予感は消えていて、のどかな空気が流れている。
「なんでもないよ……」
少し不安を残しながらも、奏希はのったりと笑った。宇月は不思議そうに奏希を見ると、笑顔を返す。
「久しぶり。奏希」
「久しぶり。宇月兄さん」
十年ぶりの会話に奏希の頬は赤くなる。大きな背に、かたちの整った顔。大人になった宇月に、奏希はたじたじなのだ。
それに――。
宇月は奏希の想い人だ。
この町を引っ越した後、思い出として残る宇月という存在に恋をしたのだ。
昔から変わらないのはそのやわらかな笑顔。全てを包み込んでくれるような笑顔。でも、奏希は知っていた。
その笑顔は偽りのものだと。
それもまた、昔から変わらない。なぜ宇月の顔にそんな笑顔が張り付いてしまったのかわからないが、奏希は宇月に共感を持っていた。宇月にも両親がいないからだ。奏希の伯父にあたる宇月の父は、二年前に亡くなっている。病死だったそうだ。母は宇月を産んだ時に亡くなったらしい。
同じ境遇にいる宇月に、奏希は心を許していた。
「ここまで来るのは大変だったろう。よく来たね」
笑顔を向けてくる宇月に、奏希は微笑み返す。
これからこの人と二人で、こののどかな町に住むことになるのだ。
傷ついた心を癒していくのだ。

宇月の横に並んだ奏希は、ゆっくりと歩きだした。
「どうして宇月兄さんがここにいるの？」
会話の冒頭に、一番手近な問題を切り出してみた。その素直な疑問に宇月は答える。
「そろそろ奏希が来るころかと思って迎えに来たんだ」
にっこりと笑みを向けてくる宇月に、奏希の心は軽くなる。
「そっか」
自然に顔がほころび、笑顔になる。それは宇月の気遣いが嬉しかったからだ。
森が風になびき、ざわざわと体を揺らす。奏希はその先の森にある石畳の階段を見つけると、薄く笑みをうかべた。
「懐かしい……」
それは、宇月の家へと続く階段だった。歴史を感じさせる長い石畳は所々欠けていて、よりいっそう味を出している。そんな階段を見上げた奏希は腹をくくったように声を出した。
「よし！」
リュックを背負い直した奏希は足を段差にかける。そんな奏希を見て宇月はくすくすと笑うと、後に続く。
その石畳の階段は、登っても登っても風景が変わらずにいた。せめてもの風景の変化は、木の本数が減っていっているということだけだ。
でも、それは嬉しい変化ではなかった。木の陰で暑さをしのげていたはずなのに、それが無くなって日差しが直にあたる。暑さが増して、疲労もアップだ。
「休まなくて大丈夫？」
涼しい顔で言う宇月に、奏希は負けず嫌いのスイッチが入る。
「ぜんっ、ぜん大丈夫！」
額に汗を浮かばせながら一歩一歩進んでいく。意外にも段数が多かったことに驚いたものの、足を止めることはなかった。
蝉たちがそんな奏希を応援するように鳴き続ける。

そして、階段と木以外の景色が見えた。それは昔ながらの古風な大きい家だった。
「――よっと」
最後の一段を登りきった奏希は、丸いジャリがひきつめられたその場に荒っぽくリュックを置いた。そしてリュックの脇にある網上のポケットから、水の入ったペットボトルを取り出した。それを片手に一気飲み……。
その飲みっぷりに、顔色一つ変えずに登り終えた宇月の顔が緩んだ。
奏希はそんな宇月に気付かず、水を全て飲みほした。
「平気？」
宇月の問いに奏希は笑顔で返事をした。
「大丈夫！」
ガッツポーズをした奏希を見て宇月は笑うと、ふと思い出したように口を開いた。
「そうだ、奏希に言っとかなきゃいけないことが――……」
「おい宇月」
宇月の話が終わる前に、低くも高くもない男の声が割り込んできた。その声の方にむくと、家のある方向から赤茶の髪をもつ男がこちらに向かって来ていた。太陽にあたってその髪が光を帯びると同時に、耳にも光るものを見つける。
（ピアスしてる……）
悪っぽいその男に、奏希は警戒心をむき出しにする。それに気づいた男は、少しの距離をあけて立ち止まると、宇月の方に向いた。
「こいつか、今日から一緒に住むって奴は」
「！」
予想もしない言葉に、奏希は目を見開く。男の問いの答えを促すように、奏希は宇月の方に向いた。
「そうだよ」
「！」

さらに驚きが増した。
そんな話は一言も聞いていない。初耳だ。第一この男は何なのだろうか。奏希の中に、いろいろな混乱が迫る。
「ごめんね奏希。いろいろあったから、今日言おうと思ってたんだ。この子は？炬（かがり）潤（じゅん）？。わけあって一緒に暮らしてる内の一人だ」
炬と呼ばれた男を見て、奏希は宇月の言葉の引っかかりを見つけ出した。
（一緒に暮らしている内の一人ってことは……まだ他にいるってこと！？）
てっきり二人で暮らすのかと思っていた奏希は、少し落ち込んでいた。いや、かなり落ち込んでいたかもしれない。
「俺と同じ高2だって聞いてたのに……ずいぶん色気のない女だな」
「！」
いきなり飛んできた言葉に、奏希はぎょっとする。
（なっ……何この男！）
初対面にも関わらず、ずいぶん無遠慮に話しかけてきた炬に奏希は苛立ちを覚える。だが、こちらまでもが言い返したら、奏希自身もこの男同様になってしまう。そう考え、腹立たしいおもいを抱えながらも奏希は口を堅く結んだ。
「それに胸がない」

ブチリ

奏希の中で何かが切れる音がした。
今までの雰囲気と変わった奏希に、いち早く気づいたのは宇月だった。そしてその敵意を受けられている当の本人は、それにまったく気付いていない。
「今、……がないって言ったよね」
虫の鳴くような小さい声が、かろうじで炬の耳に入る。
「な……」

「胸がないって言ったわね！」
炬が声をかけようとしたと同時に、奏希の叫びが重なる。
「炬とか言ったっけ！　あなた今、女の子にむかって言っちゃいけないことを言ったのよ！」
何の遠慮もなく炬を指さす奏希の指がふるふると震える。それはもちろん度を越した怒りのせいだ。
炬は黙って奏希を見ながら言い分を聞いていた。
「女の子にはもっと気を使いなさいよ！　とってもデリケートなんだから！」
勢い余って炬に一歩近づいた奏希は、顔を相手に近付ける。
それをめんどくさそうに見た炬は、ゆっくり口を開いた。
「どこに女がいるんだよ」
またもや衝撃的な一言に、奏希は怒りを積み上げていく。
「よく見れば女かもと思わねーことはねーが……女と定義づける一番大事な胸がねぇじゃねぇか。男女か？」
この気持ちをなんと言おうか。
生まれて初めて受けた最低な侮辱に、奏希は今までにないほどの怒りに呑み込まれる。
「あなたは胸で女を判断してるわけ！？」
裏返りそうになるまで声を張り上げた奏希に、炬は表情一つ変えず頷いた。
その行動が、奏希のどうしようもない怒りを逆なでする。
「あなた最低！　もういい、もういいわ！　言わないであげようと思ったけど、あなたにそんな遠慮は必要なかったみたいね！」
奏希は炬を睨んで高らかに言うと、ビシリと炬に向かって指さした。
「くさい！」
「は？」
奏希は伸ばした腕を自分の元へと引き寄せると、その手のひらで空気を切った。

「香水付けすぎ！　くさくてくさくてたまらないわ！　鼻が捻じれそう！　電車の中でよくいるおばさん並みにくさいわよ！」
奏希の罵声に炬の眉がかすかに動く。
「……電車の中にいるババァの匂いってのがいまいちよくわかんねーが……バカにしてるだろ、お前」
表情一つ変えなかった炬の顔が、奏希と同じように変化していく。
そんな炬を見て、奏希は優越感でいっぱいになる。その証拠に、奏希の顔はまだ怒りが勝っているものの、かすかにしてやったという喜びを含めていた。
そんな奏希の表情を目ざとく読み取った炬は反撃にでてきた。
「これはな、俺にあった匂いなんだよ。だいたいこれから先が不安な胸のお前に、匂いのことで心配されたくねぇよ」
「なぁっ！」
奏希の表情から余裕が取り除かれる。
言い返したいのに、思う言葉が沢山あって口がついていかない。
ただただ口を開けてはなにも言わずに閉じていくだけだ。
形勢逆転。
炬は嫌味な笑みを浮かべると、奏希に近づいた。
そして奏希の小さな胸の上に両手をぺったりのせた。
「！」
いきなりのことで頭が真っ白になるものの、すぐに状況を察した奏希はおもいっきり炬の頬を叩いた。
乾いた音と同時に、蝉が丁度よく鳴りやんだ。
「なっ、なにするのよ！」
恥ずかしさと怒りで震えた声が辺りに響く。
それを聞いた蝉は再び鳴き始めた。
胸なんて触られたことのない奏希は耳までも真っ赤にする。
そんな奏希を見て、炬は叩かれたほうの頬をポリポリかくと、奏希に向かって舌を出した。
「お前の胸はＡカップ。これから成長する見込みはほとんど皆無だ

な」
宣言されたそれに、奏希はしばしの間をおいて激怒した。
「最低！　変態！　ばかぁ！」
とにかくありったけの暴言を吐き捨てた奏希は、今までただ見ているだけだった宇月の方に振り返った。そして宇月の腕を取ると、炬の脇を抜けて目の前にたたずむ家に向かって歩いた。その足取りは少々速めだ。
そんな奏希の後ろに炬もつづく。
「ついて来ないでよ！」
その気配を感じ取っていた奏希は、声を荒げて言った。
それに炬は落ち着き払って答える。
「俺の家……お前と同じなんだけど」
「うっ……」
言われるまで忘れていた奏希は、これから先の生活を想像して顔をしかめた。
「最悪……」
限りなく小さく言われた言葉を宇月は聞き取ったようで、困ったように笑った。
「潤は……本当は悪い奴じゃないんだ」
炬の肩を持つようなもの言いに、奏希はなんともいえない気持ちになったが、それを顔に出さずにいた。
奏希は歩くスピードを落としてそっと自分の胸を見た。
確かに他の人と比べれば小さい。でも、人の一番のコンプレックスをなんの躊躇いもなく突いてくるのは最低だ。
ため息を落とした奏希に、宇月はにこりと笑って言った。
「大丈夫。ちゃんと育つから」
宇月からの不意打ちに、奏希は思わず足を止める。
そして、時間差で顔を真っ赤にさせると宇月の肩越しから見える炬を睨んだ。
（あいつのせいだ――　！）

昔の宇月はこんなことを言わなかったと記憶している奏希は、炬のせいだと考えた。
力強く睨んでくる奏希に気付いた炬は、おちょくるように舌を出した。
再び怒りが込み上げてくる奏希だったが、宇月になだめられてしぶしぶその高ぶる気持ちをおさめた。
気持ちを落ち着かせる為にここに来たはずなのに、当分そんなことはできなさそうだ。
奏希は今日二度目のため息をつき、太陽に照らされるその家へと歩いて行った。

第二部　ハジマリノウタゲ

「最悪だわ……」
奏希の呟きが、木をコンセプトとした古風な家に響き渡る。
普通の家と比べると、空間の広いこの家は風邪通りがよく、夏もクーラーいらずだ。冬はどんなものか気になる所だが、今の奏希はそれどころではなかった。
二階にある部屋に案内された奏希は、今日から自分の部屋になる場にいた。二つの部屋に挟まれた真ん中の部屋だ。
今宇月から聞かされた衝撃の事実は、奏希の右隣が炬の部屋だということだった。
確かに先ほど炬は隣の部屋に入っていった。嫌な予感がしながらも、奏希は見て見ぬふりをしていたので、宇月に決定的な一言を言われておおいに肩を落としたのだ。
そんな奏希を見て、宇月は小さく微笑んだ。
「大きくなったね。奏希」
そんなことを急に言われて頭をなでられたものだから、奏希の鼓動が跳ね上がる。
でも、懐かしい手のひらになでられているうちに、強張った気持ちが緩んでいく。
（……昔もよく、こうやって宇月兄さんに頭をなでられてたっけ）
しばらくされるがままでいると、ふいに手が離れていく。名残惜しさを感じながらも、奏希はその手を見送る。
「少し見ない間にこんなに大人になっちゃたんだね。いろんな感情も覚えて……いいことだね」
変なことを言うなと思いながらも、奏希は宇月に笑いかけた。それに宇月も笑顔を返してくれる。
奏希はリュックをおろし、部屋の中に積み上げられたダンボールを見回した。これを今日は片づけなければならない。

「よし！　じゃあもうやっちゃおうかな！」
冷たいフローリングの床にしゃがむと、奏希は近くにあったダンボールを開けようとした。
「あっ！」
いきなり声を上げた奏希は、目の前に見えるバルコニーを見た。
そして絶句。
「宇月兄さん！　この家のバルコニーって隣の部屋とくっついてるんだったよね！」
奏希の問いに、宇月は頷いた。
それに奏希は再び嘆きだす。もちろん隣の炬に対して。
「嫌よ！　景色を見ようとして外に出たら赤い幽霊がいるなんて！　気分がブルーになる！」
赤い幽霊とはまさしく――炬のことだった。
奏希がそう叫んだ後に、何かがこちらに向かってくる騒々しい音が鳴り響いた。
「てんめぇ！　隣までまるぎこえなんだよ！　ケンカ売ってんのか！？」
いきなりバルコニーから登場した炬に、奏希は立ち上がって一歩前へと踏み出した。
「なにか文句あるの！　だいたい！　始めっからケンカ売ってきてたあんたなんかに言われたくないわよ！」
奏希の言葉に反発する気まんまんで部屋へ上がってきた炬は、すぐさま口を開く。
「あれはケンカ売ってたんじゃねーよ！　本当の事を言っただけだろ」
「よく正面切って女の子にそんなことが言えるわね！　失礼よ！」
「なにいってんだよ！　お前は女のなりそこないだろ！　当てはめるなら男女だろ！」
「なっ！」
奏希は今までにないほどの怒りを覚えた。

腹が煮えくり返るとはこのことだ。
「よくできたコントみたいだ。もしかして打ち合わせしてたの？」
今まで干渉しているだけだった宇月がそんなことを言ってきた。
その言葉を向けられた二人は叫んだ。
「コントなんてしてないし打ち合わせもしてないよ！」
「コントなんてしてねぇーし打ち合わせもしてねぇーよ！」
はもった。
綺麗なはもりを聞いた宇月は感嘆の声を上げると、次に呟いた。
「息がピッタリだ」
「ピッタリじゃない！」
「ピッタリじゃねぇ！」
またもやはもった。
敵対している二人は互いに互いを睨みあった。
「ちょっと！　同じタイミングで同じこと言わないでくれる！」
「お前こそ俺のマネしてんじゃねぇーよ！」
再び始められた言い争いに、もう宇月は首を突っ込む気配はない。
なので、二人のスーパーハイパー言葉のキャッチボールは激しさを増していく一方だ。
「おい、五月蝿（うるさ）いぞ。静かにしろ」
奏希の耳に、初めて聞く者の声が入った。
低い声だがどこか綺麗に聞こえる声だ。
奏希がその声のした方に向くと、部屋のドアに一人の男が立っていた。
流れるような黒い髪に、長いまつげ。シャープな輪郭は、男の美しさを表現している。言うならば眉目秀麗な知的男子だ。
「あぁ、雪（せつ）。ちょうどよかった」
宇月はその男のことを雪と呼んだ。
奏希は炬を完全に視界の外にやると、雪という男をじっと見つめた。
「奏希、紹介するね。この子は？碓氷（うすい）　雪（せつ）？。この家に住んでる一

人だよ。ちなみに奏希と同じ年だから」
宇月はにこやかに碓氷を紹介した。
奏希は碓氷の整った顔を遠慮なしに見ていたが、宇月に笑いかけられハッとした。
「私、姫宮　奏希です！」
そう言うと、奏希は深々と頭を下げた。
炬と対面した時とは似ても似つかぬ態度だ。
奏希が頭を上げると、碓氷は何も言わずじっと奏希を見ていた。
奏希はどうすればいいのか反応に困ったようで、体をそわそわし始める。
「おいおい、トイレか？」
後ろから嫌味な声がかかってきた。
その声が誰だかわかっている奏希は顔を険しくさせながら振り返った。
「そこ！　黙っといて！」
それだけ言うと奏希は碓氷の方へと体を戻した。
「え……あれっ？」
目線を元へと戻したはずなのに、そこには誰もいなかった。
人の気配を感じとりその先を見ると、階段を降っていく碓氷の姿が見えた。何も言わずにその場からいなくなった碓氷を見ながら、自分の態度が何か悪かったのかと考え始めた。
「あぁ、気にしなくてもいいよ。雪はああいう子なんだ。シャイ……なのかな？」
にこにこ笑いながら言う宇月に、奏希は本当なのかなと思いながらも信じることにした。こんな些細なことを気にしていれば、これからここで生活してはいかれないと思ったからだろう。まぁ、そんなことを一番思わせたのは、初対面にもかかわらず奏希を威嚇してきた炬のせいだろう。
「雪の部屋は向こう側だから」
宇月は階段を挟んでその先にある部屋を指差した。三個あるうち

の部屋の一つだ。奏希と同じ、真ん中の部屋。
「雪に用がある時はその部屋だからね」
宇月は微笑みながら言うと、次は炬の方を向いた。
「潤、そろそろ部屋に戻ったらどうかな。ここにいても奏希との言い争いになるだけだし」
張り付けられた笑顔を向けられた炬は、文句ひとつ言わずバルコニーから出て行った。
「そこから出ていくんだ……」
誰にも聞こえないように呟いた奏希は、始めにやろうとしたことを思い出して段ボールを見た。
「荷物整理しなきゃ……」
フローリングの床にしゃがみ込んだ奏希は一つの段ボールを引き寄せた。
「俺も手伝うよ」
宇月は奏希同様そこにしゃがむ。そして段ボールを開き、中のものを取り出していく。その段ボールの中身は、ほとんどが小物などの家具だった。
奏希も早く整理を済ませようと中身を引っ張りだした。奏希の段ボールに入ってるものは主に衣服類だ。
「あっ……」
奏希は動かしていた手を止めた。
窓から入ってくる風が奏希の黒髪をなびかせる。さわさわ、さわさわと。
「どうしたの？」
奏希の異変に気付いた宇月が声をかけてきた。
それに奏希は一つ間をおくと、段ボールから一つの写真を取り出した。端々は焦げ付いており、写真に写っている人物はかろうじで見えるほどだった。
奏希はそれを見るや泣き出しそうな顔になった。唇をきつく閉じ、瞳を潤ませている。

そんな奏希に宇月はゆっくりと近づいてきた。
「この写真だけが……無事だったんだ……」
結んでいた口を開いた奏希は震える声でそう言った。そして我慢が出来なくなったように涙を流した。
その写真には、奏希の祖父と祖母が写っていた。幸せそうな笑顔を見せながらそこに映っている二人が。
「だめだね、もう……泣かないって決めたのに」
奏希はその写真を胸に抱いた。
奏希の祖父と祖母は火事のせいでなくなった。奏希が家を空けているときだった。
悔んでも悔やみきれない思いにかられながら、奏希は嘆いたのだった。自分がその時家にいれば、もしかしたら……と。
二人がいなくなってしまったときのあの感情が奏希に戻ってくる。
「いいんだよ」
優しい声が奏希の耳にくすぶった。包み込んでくれるような、心地よい声が。
「いいんだよ、泣いても。我慢したら、もっと悲しくなるから……」
垂れた奏希の頭を宇月が大きなその手で撫でてきた。
撫でられる感覚に、奏希の心が穏やかになっていった。悲しみが少しずつ引いていく。不思議な感覚だ。
(なんて、温かい人なんだろう……)
奏希の黒い瞳からぽろぽろと雫が落ちていく。
夏の光に照らされながら、奏希は宇月の優しさを受け止めた。
(大丈夫……一人じゃない……宇月兄さんがいてくれる……)
奏希は自分にそう言い聞かせ、ゆっくり目を閉じた。
眩しいほどの光が部屋に差し込み、心地よい風が奏希の頬を撫でる。
外では蝉の鳴き声が夏の合唱を奏でていた――……。

第三部　ハジマリノウタゲ

風通りがいいのがこの家の特徴だ。古風な木の家は見ているだけでも涼しくなる。そしてその家の敷地は広く、キャッチボールぐらいは出来そうだ。周りには砂利がひきつめてあるし、まさに和の家という感じだ。

そんな家に住むことになった奏希は、下の階にある和室の居間に向かおうと、階段を下りていた。

外はもう暗く、夜が来ていた。

奏希は居間の襖（ふすま）を開けると、開口一番に大声を出した。

「ちょ、ちょっと！　行儀悪いわよ、炬！」

奏希は畳に仰向けになって寝転がっている炬を見た。両手を頭の後ろに回し、足は山折りにして片方の足をもう片方の足に組み合わせている。

濡縁のある窓から風が吹き込み、炬の赤茶の髪を揺らしていた。自分の髪が肌にあたっているにもかかわらず、炬は目を開かなかった。

「聞いてるの……？」

部屋の真ん中に置いてある低い木のテーブルの横を抜け、奏希は炬の傍に寄り、座った。そして炬の頬を軽く叩いてみた。

「……ね、寝てる？」

ピクリとも動かない炬に、奏希はそう呟いた。

奏希の思った通り、炬は深い眠りについていた。風が運ぶ涼しさの中で、ついつい寝てしまったのかもしれない。

寝ているだけなら害はないのにと思いながら、奏希は炬の事をじっと見ていた。

（ん？）

奏希は炬の顔を真上から覗き込んだ。肩にかかった髪がスルリと

落ち、炬の頬をくすぐる。
（なんだろこの傷……）
炬の髪の隙間から覗く左眉の小さな傷に、奏希は興味を示した。
少しためらいながらもその傷をなぞってみると、炬の目がかすかに動いた。
（わっ！）
奏希はとっさに手を引いた。
幸い、炬は起きなかったようで、気持ちよさそうに寝息をたてて眠りについている。
（あ、危なかったー）
奏希が胸をなでおろすと同時に、誰かから不意に声をかけられた。
「眠れる森の美女みたいにキスすれば起きるかもよ。……あっ、でもそれじゃあ立場が逆か」
いきなり声をかけられたことと冗談でも笑えないことを言われ、奏希は勢いよく後ろを振り返った。
「なっ、ななな、何言ってるの、宇月兄さん！」
素早い動きで振り向いたせいで髪が凶器になり、炬の顔を叩きつけた。それに気づいていない奏希は、声の主、宇月に向かって言葉を並べていた。
「ありえないから！　そそそ、そんなこと、頼まれたってしたくないんだからね！　絶対に！」
炬が手で顔を塞ぎながら唸っていることに、奏希はまったく気づいていない。
「奏希、キスしたことないんだ」
「！？」
変わらないにこやかな顔をしてそう言われた奏希は、一気に顔を赤くさせた。そして余計に頭がいっぱいになったせいで、炬が起きたことにまったく気づかなかった。
「に、兄さん！　からかわないでよ！　ちょっとみない間に性格変わったわ！」

赤面させた顔を隠しながら言った奏希に、宇月はハハッと笑った。
「そうかな？」
悪ぶれる様子もない宇月に、奏希はそこに座り込んだまま　うぅっと唸った。
そしてここで、忘れられていた存在のアイツが動き出した。
「おい、てめぇ！」
不意に、顔を隠すために使われていた手が、誰かの手によって引っ張られる。奏希はとっさの反応で空いているほうの手を畳につけた。
「人が気持ちよく寝てるところを起こすなんて……いい度胸してんじゃねぇか」
手を引っ張ったのは炬だった。
寝起きが悪いのか、それとも本人が言った通り起こされて気分が悪いのか、炬は傷のある眉を寄せていた。
だが、今の奏希はそんなことどうでもよかった。奏希が意識していたのは、今自分がおかれている状況だった。
「……っ！」
奏希は上半身だけ起こしていた炬に覆いかぶさるような体勢になっていたのだ。これも、炬が奏希を引っ張ったせいだ。
「ちょっと……何するのよ！」
炬に掴まれた手を自由にしようと悪戦苦闘するが、びくともしない。逆に、抵抗すればするほど、炬との距離が縮まっていった。
「お前、キスしたことねぇーんだって？　そりゃちょうどいい」
炬はニヤリと口元を引き上げた。
「お前むかつくし」
意味のわからない言葉に、奏希は戸惑いをみせる。それと同時に自分の手を引く相手の力が強くなった。
「なっ！」
炬の顔に、奏希の顔が近づいていく。
当然奏希はそれを阻止しようと足掻くが、状況は変わらない。も

う一つの手を使って炬を押し返そうとするが、それをしたら逆に相手のツボだと思い、行動に移せなかった。
（最悪――！）
奏希は体をのけ反らせるものの、男である相手の力には敵わない。目を力強くつぶり、奏希は身構えた。
「こら！　やりすぎ！」
奏希の後ろから手が伸びてきて、炬の顔を押しやった。
天の助け、宇月さまさまだった。
「に、兄さん……」
奏希はほっとしたようで、後ろにいた宇月に寄りかかる。
宇月はそんな奏希を優しく受け止め、よしよしと頭を撫でた。
炬は舌を出すとその場にあぐらをかいて座る。悪いことをしたという自覚がないようだ。
そんな炬を見ていて腹が立ってくる奏希だったが、今は反発する気がおきなかった。
しばらくして、奏希は宇月に？ありがとう？と言って離れると、炬から一番遠い場所に座った。宇月は奏希の隣に座る。
重苦しい空気の中、襖が開く音がした。
「あ、碓氷君」
奏希がそう呼ぶと、襖の前に立っていた碓氷はちらりと奏希を見て、すぐに目をそらす。
（き……嫌われてる？）
宇月に碓氷はシャイなだけだからと言われていても、そう思わずにはいられない。奏希は一人肩を落とした。
そんな奏希の前の席に、碓氷は腰をおろす。
そして、何かをテーブルの上に置く。そこには何冊もの本が置いてあった。
その本の中の一つから、奏希は気になる題名の本を見つけた。
「パンドラの……箱？」
奏希の言葉に三人がいっせいに彼女を見たが、そのことに本人は

気づいておらず、その本とにらめっこをしていた。
「ねぇ、宇月兄さん。パンドラの箱ってどんな話だったかな……」
小さい頃、誰かに読んでもらった気がするが、その内容をはっきりとは覚えていなかった。
奏希の質問に、宇月は少しの間をおいてから語り始めた。
「プロメーテウスという神が、ある日天界から火を盗んで人々に与えたんだ。そのことに怒った神々の王ゼウスが、人類に災いをもたらすために、パンドーラという女性を作り出し、ある箱と共に地上に送ったんだ」
話す宇月の顔は、どこか感傷的に見えた。
「ある日、パンドーラはゼウスに開けてはならないと言われていた箱を、好奇心に負けて開けてしまったんだ」
薄く笑みをのせながら話す宇月に、奏希は喰らいついていった。
「それで！？」
先が気になる奏希は隣にいる宇月に無意識に詰め寄っていた。
そんな奏希を見た宇月は、ぴんと人差し指を立てて言った。
「続きは自分で読んで確かめて。雪に本を借りてね。いま教えてあげたところは、ほんの一部だから」
にっこり笑った宇月に、奏気は不満げな顔をしたが、それもすぐに直る。
いつの間にか本を読んでいた碓氷に向かって、奏気は恐る恐る声をかけた。
「ねぇ、碓氷君……今度その本、貸してくれないかな？」
奏希の声を聞いた碓氷は、長いまつ毛が付いたまぶたを上げ、じっとこちらを見てきた。
奏希はそのほんのわずかな動作に見惚れてしまったが、すぐに顔を引き締めて碓氷を見返した。
「……あぁ、いいだろう。読みたいときに俺の部屋に来てくれれば、いつでも貸してやる」
その返事を聞いた奏希は、心にじーんとするものを感じた。

（初めて会話が成り立った……！）
本当は今すぐにでも借りたかった奏希だったが、話が少し続いたことで胸がいっぱいになっており、それでもう満足したようだ。
そんな風に喜びに浸っていると、宇月が声をかけてきた。
「そうだ、奏希。一応、学校に手続はとってあるから、後は編入試験を受けるだけだからね」
学校の話になって、奏希はあることを考えた。
「も、もしかして……炬と同じ学校……？」
ロボットのように首をカタカタさせて宇月の方を向くと、目の前にいるいとこの代わりに、むかつく相手が返事をしてきた。
「もしかしなくても俺と同じだよ」
衝撃の一言に、奏希は顔に縦線を浮かび上がらせる。
だが、一つの希望を見出して、奏希は自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ。
「で、でも大丈夫よね！　クラスが一緒にならなければ、顔を見る事なんてそうそうないもの！」
一人納得して頷いていると、炬がまたもや衝撃的な一言を口にした。
「残念でした。うちの学校は人数が少ないから他の学校と違って一クラスしかねぇんだよ」
落ち込み度がマックス。
よく考えてみれば、ここは町の中心ではないから人が少ない。賑わいがある町の方とは反対にある森の中の学校だ。生徒が少なくて当然だ。
沈黙の中、碓氷が本のページをめくる音がやけに響く。
奏希は身動き一つ取らずにそこに固まっている。
そんな状況の奏希を解放しようと、宇月が明るい話へともっていこうとした。
「そういえば奏希。そこの高校の制服、女子はピンクがベースになっててかわいいんだよ」

それを聞いた奏希は硬直状態を解き、目をキラキラさせながら宇月を見た。
女の子はファッションに興味があるのだ。
奏希は先ほどの話題を忘れたように宇月の話にのめり込んでいった。
「本当！？　やったぁ！　制服はやっぱりかわいくなきゃね！」
すっかり機嫌がよくなった奏希は、頭の上に音符をのっけている。
さすがいとこ。奏希の扱いがお手の物だ。
宇月は相変わらずにこにこと笑いながら、喜ぶ奏希を静かに見守っていた。
と、玄関の戸が開く音が響いた。
その音の後には、元気で愛らしい？ただいまです？の声が耳に入ってきた。そしてバタバタと居間に向かって走ってくる音も……。
「姫さん！」
勢いよく開かれた襖の前に、バスケのユニフォームを着た一人の少年が立っていた。小柄でかわいらしい男の子だ。
どちらかというと白い肌に、ふんわりとした癖のある薄めの茶髪が似合っている。
「会いたかったですよ！」
そう言うと、その子はいきなり奏希に抱きついてきた。
「え……えぇ！？」
予想もしなかった相手の行動に、奏希は身動きがとれない状態になってしまう。
そんな奏希を気にせず、その男の子は容赦なく抱きつく力を強めていく。
宇月は笑いながら見ているし、碓氷は本しか見ていない。炬にいたっては、興味なさそうに頬杖をついてあくびをしていた。
奏希はどうすればいいのかわからず、されるがままになっていた。
「会えるのを楽しみにしていたんですよ。姫さん！」
男の子は腕の力を緩め、奏希の顔を覗きこんだ。

やっと解放された奏希は、男の子の言葉に、言葉を返す余裕が出来た。
「姫さんって……私のことを言ってたんだ……」
奏希の呟きに、男の子は微笑んだ。
「はい。あなたは姫宮　奏希さんですよね。だから姫さんです」
へたすれば普通の女の子よりもかわいらしい笑顔を向けられ、奏希はぽっと顔を赤らめる。
「な、なんか恥ずかしいなぁ」
自分の顔がどんどん赤くなるのを感じて、奏希はもっと恥ずかしくなった。
それを見た男の子はにっこりと笑うと、奏希の手をとって自己紹介をしてきた。
「僕は？水野（みずの）　晶（あきら）？です。姫さんの一つ下ですから、かわいがってくださいね」
愛らしい笑顔を見て、うんと頷くよりほかはなかった。奏希は自分の自己紹介もきっちりと済ませて？よろしく？と言った。そしてその後に、宇月が声をかけてきた。
「これでここの住人にあいさつし終わったね」
それを聞いて、？ある理由？で宇月の家に一緒に住んでいるのは、炬と碓氷と水野で全員なのだと奏希は把握した。
これからこの四人と共に、ここで過ごすのだ。
奏希はしっかりしようと心に決め、背筋をぴんと伸ばす。
「それと奏希。守ってほしいことがあるんだ」
宇月の真剣な顔つきに、奏希もつられてそんな面持ちになってしまう。
「外には一人で出歩かないこと。特に……夜はね――」
奏希は何か嫌な予感がしたが、硬い笑顔で言った。
「やだなぁ宇月兄さん。心配性なんだから」
宇月の言葉の意味と、奏希が感じた予感がなんなのかわかったのは、すぐ後のことになったのだった――――。

第四部　ハジマリノウタゲ

お父さんは厳しい人？　お母さんは優しい人？　そんなことを聞かれたって、答えは出なかった。思い出そうとしても思い出せない。記憶にない両親。どうして、愛してくれたはずの人達を、私は忘れてしまったんだろうか――――。

＊

奏希は一人、バルコニーで一枚の写真を見ていた。

昼間、段ボールから取り出した写真とは違う、焼け焦げていないものだ。

写真の中には、奏希の父と母が写っている。

「なんで覚えてないのかなー」

写真を見ながら奏希はそんなことを言ってみた。

これは今日、宇月からもらった写真だ。これしか両親の写真は無いらしく、私に渡していた方がよいのではないかということで、受け取ったものだ。

奏希が六歳の時、両親は他界した。そのぐらいの歳なら、何か覚えていてもいいはずなのに、奏希は両親のことを何も覚えていなかった。

奏希はじっと写真の中の両親を見続ける。

幸せそうに笑って寄り添う二人は、今はいない存在なのだとは考えられない。

声も、笑い方も、話し方も知らない両親のことを考えながら、奏希はバルコニーの柵に前のめりになって寄りかかった。

夜風に吹かれながら、奏希は写真を見つめる。

その時、突風が奏希を襲った。
「わっ！」
奏希は反射的に目を閉じる。そして、その後に手に感じる涼しさを感じた。
「あっ……」
自分の手を見てみると、そこにあったはずの写真がなかった。今の風にさらわれ、下に落ちていってしまったようだ。
「どーしよう……」
暗闇の先を見つめながら、奏希は小さく呟いた。
両親の写真はあれ一枚。しかも宇月から受け取ったものである。
しばらく考え込んでから、奏希は夜空を見上げた。
「一人で外には出ちゃだめだって言われてるけど……少しぐらいなら大丈夫だよね」
奏希は月の光に目をやると、その輝きから逃げるようにして部屋に戻って行く。
外では風が吹き、唸りをあげる獣のように辺りを取り巻いていた。

第五部　ハジマリノウタゲ

お風呂から上がった炬は、濡れた髪のまま自分の部屋へと戻って行く。
部屋の前で一度立ち止まった炬は、隣の部屋をちらりと見やった。その部屋には、今日から一緒に住まうことになった奏希がいる。
炬はしばらくその部屋のドアを見ていた。
そしてその部屋から目をそらすと、何事もなかったように自分の部屋のドアノブをひねって中に入っていく。ドアのすぐ横にある照明のスイッチを入れると、部屋が明るく照らされる。
部屋の中は意外にも綺麗に整頓されており、必要最低限のものしか置いていないという感じだ。
炬は短い息をはきだすと、バルコニーへとつながる窓を見た。
外は暗く、夜空はすがすがしいほど透き通っていた。星が、月が、地上に光を差し込んでいる。
炬は外の空気を吸おうと、バルコニーへと踏み出した。
風が炬の肌に涼しさを感じさせる。
炬は二階から見える夜の景色を見た。
辺りは森に囲まれていて、ほとんどなにもない。光も月と星だけだ。
「――胸が……ざわつく……」
炬は誰にも聞こえないような声でそう呟いた。
刹那、風が荒れるように吹いた。
炬は違和感を感じ、暗闇の先をじっと見つめた。
「！」
炬の耳に、土を踏みしめ草をかき分けるようなかすかな音が入ってきた。
音の方に目を向け、やっと闇に慣れてきた己の目を凝らすと、そ

こに黒髪をなびかせる奏希の姿があるのを見つけた。
「……っあんのバカ……ッ！」
奏希を目にした炬は険しい顔をして、小さな舌打ちをした。
炬がきびすを返し、奏希の元へ行こうと前に踏み出した時、奏希の甲高い叫び声が聞こえた。
「きゃぁぁ――――！」
その声を聞き、炬は足を止めて体を反転させる。そして、奏希がいた方へ目線をやる。
「おいおい、まじかよ」
奏希は茶色の地面に尻餅をついていた。そして、目の前にいる――黒い化け物を見ながら震えていた。
周りの木と同じぐらいの高さの、犬に似た化け物だ。赤い眼は血に飢えた獣のようにらんらんとし、鋭い牙は獲物を捕らえるための武器だと言わんばかりにむきだしにされている。
「くそっ――」
炬はバルコニーの柵に手をかけ、身を乗り出した。
そして、何のためらいもなくそこから飛び降りた。
二階だからと言っても、普通の家より高さはある。そんな所から落ちたら、骨が折れるかもしれないのだ。
だが炬は恐怖を感じることもなく、落ちていく。
「解！」
炬がそう叫ぶと、彼の周りに赤々とした炎があらわれた。そして、のみこむようにして炬の全身を包み込んでいく。
赤い炎は月の光にも負けないぐらい、明るく照っていた。

第五部　ハジマリノウタゲ（後書き）

これからだんだん盛り上がってきます！
書くのも楽しみです！

第六部　ハジマリノウタゲ

奏希は暗闇の中、一人で歩いていた。
落とした写真がこのあたりにあるはずだと考えた奏希は、しゃがみ込んで草をかき分けてみた。
だが、それらしきものは見つからない。
あせってもいけないと思った奏希は、場所を変えながら辺りを見回す。暗い夜のこの時間帯ではろくに何も見えないが、それでもあきらめずに奏希は写真を探す。
「あ……」
奏希は揺らめく何かを見つけた。
走り寄ってそれを拾い上げてみると、両親が写っている写真だった。
「よかった……」
胸をなでおろすと、奏気は小さく微笑んだ。
「さっ、早く家の中に入らなきゃ！」
奏希は戻ろうと体を後ろへひねらせた。
「え……」
その刹那、奏希の目の前が、闇の黒よりもっと濃くなった。そして、破砕音のごとく奇声が耳にうるさく響いたと思うと、奏希の目には見たこともない化け物が映りこんできた。
「！」
逃げ出すよりも先に、恐怖が奏希の自由を奪う。
力が抜けた奏希はその場にへなへなと座り込んでしまった。
「ギャエエエエエエ！」
頭の中が真っ白になった。
得体のしれない化け物が、目の前にいる。恐怖で思考が働かない。
この耳障りな鳴き声が、体の力を抜いていく。

奏希は化け物から目を離せずにいた。
そうしていると、化け物は赤き口腔を見せつけるかのように叫びをあげた。
「ギァエエエエ――」
奏希の鼓動が駆けていく。
指先さえ動かない体に、奏希は必死に命令した。
（動いて！　私の体！　逃げるのよ！）
だが、そう簡単に抜けた力は戻ってこない。そうしている間に、化け物は奏希を目で捕らえ、そのでかい図体からは想像できないほどの速さで襲い掛かってきた。
「――――！」
奏希は目をつぶった。自分の行く末を覚悟して。
だが、その時は一向におとずれなかった。
恐る恐る目を開けると、目の前に誰かの背中があった。その背中の主は、化け物の頭を片手でわしづかみにしていた。
「おせーんだよ。このデカブツが」
その声は、聞き覚えがある声。
奏希は一瞬でその人物が誰なのかがわかった。声をかけようと口を開けるが、声が出ない。
目の前の人物は開いている方の手のひらを空に向けると、信じられないことをして見せた。
「！」
その手に、炎が燃え上がったのだ。赤く暗闇を照らす、火が……。
その人物は火をそのままに拳を握ると、それを化け物の頭に喰らわせた。
「ギャェェェ！」
殴られたところから、化け物の体に火がひろがっていく。首を振り回したり地面に頭を擦りつけたりして火を消そうとしている。
「立て！　男女！」
そう言われ、奏希は化け物から目を離し、その声の主を見た。

目の前にいたのは――――赤き髪に灼眼の瞳を向けてくる炬だった。
赤い赤い赤い。燃えるような赤が、炬を染めている。
「え……」
赤が目の前にひろがった奏希は、胸が揺れ動いた。
恐怖と懐かしさが、胸を締め付ける。なぜだかわからないが、涙が出てきた。
「……」
炬は無言の後ため息をつくと、奏希の腕を掴み、引っ張った。
「泣くんじゃねーよ」
言い方は厭味ったらしいのに、どこか優しいその声に余計に涙が零れ落ちた。
炬はそんな奏希を肩に担ぐと、颯爽と夜を駆けて行く。
「ちょっ……！」
奏希はいきなりのことと恥ずかしさで声がうわずる。顔は心なしか熱い。
「騒ぐな！　じっとしてろ！」
手足をばたばたさせていた奏希に、炬はぴしゃりと大声を上げた。
「……」
どうも反抗できなくて、奏希は動きを止める。
炬は立ち止まると、ゆっくりと奏希を肩からおろした。
「あっ――」
地に足が付くと思うと、奏希はそのまま倒れ込みそうになった。
まだ力が抜けているようだ。それを支えてくれたのは、炬だ。
「おい、大丈夫か」
炬は奏希を自分の元へ引き寄せ、胸に寄りかからせた。
「あ……ありがと……」
炬の行動に、奏希は狼狽えながらも礼をする。
「ギェェェェ！」
どこからか鳴き声が聞こえた。

それを聞いた奏希はびくりと体を揺らし、無意識のうちに炬にしがみついていた。その行動を返すように、炬は奏希の肩を抱く。
「俺から離れるんじゃねぇーぞ」
見上げた先には森を睨みつける炬が見えた。その双眼は燃える赤。みしみしと木が倒れる音と共に、地面を揺らすような足音がこちらに近づいてくる。それと同時に恐怖が湧き上がる。
「ギャェェッェェェエエ――」
近くで聞こえた声は、すぐ目の前まで近づいてきていた。
木が、目の前の木が、倒れた。
そこにいたのは、ただれた赤黒い肌を持った化け物だった。先ほどのあの化け物だ。
「ギャャャャャアアアア」
化け物は奏希たちを見つけると、月に向かって叫びをあげた。
炬はそれを合図にしたように、奏希を支えていないほうの手を化け物に差し出した。そして、手のひらを化け物に向けると同時に、そこに文字が書かれた赤い陣が現れた。
「鳳凰火(ほうおうび)！」
炬がそう叫ぶと、その赤き陣から燃え盛る鳳凰鳥が出てきた。
炎の鳳凰は勢いよく化け物に突進する。
「ギャェェェェ――」
化け物は鳳凰の火に飲み込まれて、苦しそうにうめき声をあげる。
黒い肌は簡単にもろく剥がれ落ち、血が流れる。
奏希はそんな光景から目を離せなかった。赤い血が、赤い眼から涙のように流れ落ちている。
一瞬、強い風が炎を掻き立てる。より一層大きく燃え上がった火柱が、奏希の肌をじりじりと熱気で熱くさせた。
奏気は炬のシャツをぎゅっと掴んだ。そして、目の前で燃え盛る炎を見ながら呟いたのだった。
「写真――」
自分の手の中に写真がないことに気づいた奏希は、炬から手を離

した。そして、炬の腕から抜け出そうと、まだ戻りきっていない力を振り絞った。
「離して……」
力の戻らない手で奏希は炬を押す。それでもしっかりと掴まれた炬の手が、その行いを許さない。
「お前、何バカなこと言って……」
「離して！」
かすれた声で奏希は叫んだ。
そのせいで、熱気漂う空気を思いっきり吸い込んでしまった奏希は、咳き込んだ。
「っ……」
倒れ込むようにして炬に寄りかかると、奏希は相手の胸に顔を埋めた。
炎の光が二人を照らす。影は森の中へと長く伸び、どこか不気味だった。
炬は奏希を逃さないようにと、用心して先ほどより力を強めた。
「……お父さんとお母さんの写真……」
奏希は弱弱しく呟いた。
知らないはずの両親なのに、写真が無くなってしまったと思うと悲しくなってきた。考えるよりも先に、体が動いてしまった。
炬はその声を聞きとったらしく、口を開きかけたが、閉じた。かける言葉が見つからないのか、それともそうしたほうがいいと思ったのか、本当のことは炬だけが知っている。
「ギェェェェェェェェ」
声が突然大きくなった。と、思うと激しい揺れが、奏希たちのバランス感覚を奪う。
「！」
立っていられないほどの揺れに、二人は崩れ落ちるようにして冷たい地に体を転がせた。
奏希が目の前の化け物を見ると、その化け物が激しく四本足を地

面に叩きつけていた。それがこの揺れに繋がったようだ。
奏希がその化け物を呆然と見ていると、離れてしまった炬が地を這ってこちらまで来た。
「くそっ――」
耳元で舌打ちを聞いた奏希は、次に肝を冷やした。
「！」
炎を纏った化け物の黒く赤い異形の手が、襲い掛かってきたのだ。
予想もしなかった事態のようで、炬も行動が遅れる。炎を手にまとわせるが、遅い。
奏希は今度こそ覚悟を決めた。
そして、記憶が頭の中に駆け巡る。
悲しかったこと、嬉しかったこと、楽しかったこと、頭にきたこと。幸福なことばかりの人生ではなかったけど、それでも?今?を生きていた。
奏希は目をつぶった。
だがそれは、死ぬ覚悟のためのものではなかった。
（私は――――生きたい！）
叫びが天に響いた。
奏希の想いは化け物の奇声と共に風にのせられ、全ての空に広がっていく。その言の葉が、彼女を守るべき者達に、鐘を鳴らすように響く。

どこにいても、離れてしまっても、繋がっているの。私たちの絆は――――――――。

風が激しくふきあげた。
それと共に地の揺れはおさまり、化け物が苦悶の声を上げている。
奏希がそっと瞳を開くと、化け物がこちらに伸ばしてきた手が無くなっていた。
化け物の腕から滝のように流れだす赤い血が、奏希の思考を鈍く

させる。
（え――――？）
血は地面に広がり、土を赤くさせる。それが、奏希の元にも迫ってきた。
「！」
奏希はとっさに起き上がり、その血から逃げるように後ずさる。
隣にいた炬は奏希と同じく、何が起こったかわからないようで、その場に立って化け物を呆けたように見ていた。
「相変わらず甘いね、潤。そんなんじゃ殺られたって文句を言えないよ」
聞き覚えのある穏やかな声に誘われて、奏希は後ろを振り向く。
そこには、周りに何匹もの紫色の蝶を従わせた宇月の姿があった。
炎に照らされた宇月の顔は、一段と美しく、魅惑的に感じられた。
「宇月……兄さん……？」
なんだかその姿が宇月に見えなくて、奏希は確認するようにいとこの名前を呼んだ。
すると、宇月は奏希の方を見て、優しく笑いかけた。
「無事でよかった、奏希」
宇月は奏希の傍に寄ると、頭を柔らかく撫でた。
「なんだよ宇月。お前が出てくるなんてめずらしいな。厄介ごとはいつも俺らに任せるってのに」
炬がかけてきた言葉に、宇月はにっこり笑う。
「君たちだけに任せるのは今日限りにするよ。守るべきものが俺の目の前にいるからね」
炬と話していた宇月は奏希の方を向いた。
会話の意味がわからない奏希は、余計に混乱する。もう頭の中がパンパンだ。
「まぁ、今回の後始末はあの二人にお願いするとしようか」
そう言って化け物の方を宇月が見るので、奏希もつられて目をそちらに向けてしまう。

いまだ燃え続ける化け物は、手が一本無くなったことで、頭を差し出すようにして倒れていた。起き上がろうとも、そのでかい図体を支える柱が足りない。

そんな化け物の近くの木に、二人の人影が降り立ったのが見えた。火の光で見える彼らの容姿は、異様な雰囲気をかもちだしていた。一人は涼しげな水色の髪を持ち、目の色も髪と同じだ。もう一人は漆黒の髪を持ち、闇よりも濃い色の瞳を化け物に向けていた。

それを見た奏希は驚愕の色を示した。

その二人が、とても似ていたのだ。水野と碓氷に……。いや、似ているなんてものじゃない。あの二人は水野と碓氷だ。

奏希の中に、保証のない確信がうまれた。

海のように透き通った青を持った水野が、天に手を伸ばした。するとそこから手品のように水が生まれだし、闇夜の空にふき出していく。その水を碓氷が仰ぐと、ただの液体が固まり、氷の刃になっていった。

その刃は重力が従うままに加速して、化け物に降り注いでいく。

「ギェェェ――――ェェェェ」

叫びすぎて、喉に声が詰まったような奇声を上げる化け物を見ていられないと思った奏希だが、なぜか目が離せなかった。離してはいけないと思った。

完全に身動きがとれなくなった化け物は、力なく地にふせっていた。

氷の刃は火の熱さで溶けていき、化け物の血と混ざりあう。

碓氷はそんな化け物を感情のない瞳で見ると、一段と大きい氷の刃を作り出した。そしてそれを化け物の頭にめがけて投げ放った。

「！」

化け物の叫びが、蝉が息絶える時のようにしぼんでいく。

奏希は一度視界から化け物を追い出し、そして再び目を向ける。

その時見た化け物の姿は、物体ではなかった。

砂漠の砂のように、すくってもすぐ指の隙間から落ちてしまいそ

うな灰になっていた。灰は風に乗って夜空へと舞い上がり、幾多もある星になるように散らばっていく。
奏希は目の前で起こったことの整理がつかないようで、困惑の表情を浮かばせた。
そんな奏希に、宇月はため息がこぼれそうな声で話しかけてきた。
「一人で外に出ちゃいけないって言ったよね、奏希」
宇月の表情に真剣さの色を読み取った奏希は、うつむきながら声を出した。
「……ごめんなさい……」
奏希の中に少し悲しさが芽生えた。
両親の写真はあの一枚だけ。たとえ覚えていない両親でも、唯一の写真となると手放しがたい。
奏希は冷たい色の地面を見ながら黙り込んだ。
そんな奏希の肩を、宇月は優しくたたいてきた。
奏希はゆっくりと宇月の方を見る。宇月の周りに飛んでいた美しい蝶はいなくなっており、どこかさみしく感じた。
「お姫様の探し物はこれかな？」
宇月がわざとらしく笑って差し出したのは、一枚の写真だった。
「これ――」
奏希はその写真に手を伸ばす。
宇月からそれを受け取ると、奏希はほっとしたように笑った。
「ありがとう。宇月兄さん」
奏希の手の中には、両親が幸せそうに笑っている写真があった。
「姫さん！」
後ろの方から、愛らしい声の中に不安が混ざった声音が耳に届いた。
その声の方に顔を向けると、奏希の知っている姿の水野がこちらに駆け寄って来ていた。
髪の色、そして目も、青の薄い色ではなくふんわりとした栗色に戻っている。

「お怪我はありませんでしたか？」
心配そうな顔を覗かせてくる水野に、奏希は恥ずかしそうに笑った。
「うん。大丈夫だよ。ありがと、水野君」
そう言うと、水野は安心したように微笑んだ。本当に心配してくれたようだ。
と、水野の後ろに動く人影を見つけた奏希は、そちらに目をやる。
闇に紛れるように、碓氷が一人、立っていた。
月明りで照らされる無機質な顔が、今は一段と美しく見えた。そして、どこか悲しくも感じられた。
「奏希」
名前を呼ばれた奏希は、碓氷から目を離し、声をかけてきた者の方に体を向けた。
「家の中に入ろうか。ここは危ないから。いろいろ話したいこともあるし」
奏希に声をかけた宇月はいつもの笑顔でにこりと笑った。
奏希はこくんと頷くと、歩き出す。
信じられない光景を見た奏希は、それがなんなのかを確かめるべく、今日から自分の家になった建物の方へと歩みを速めていく。
そんな奏希を炬が見ていたことを、彼女は気づいていなかった。

第七部　ハジマリノウタゲ

とある神話に、？パンドラの箱？という物語がある。
ある日、プロメーテウスが天界から火を盗み、人類にそれを与えた。そのことに怒ったゼウスは、人類に災いをもたらすために、パンドーラという女性を作るように神々に命じた。アプロディーテーから美しさを、アポローンからは音楽・治癒の才能などを、パンドーラはわけあたえられた。
決して開けてはならないという箱と共に、パンドーラはプロメーテウスの弟であるエピメーテウスの元へ送り出された。
美しいパンドーラを見たエピメーテウスは、プロメーテウスの？ゼウスからの贈り物は受け取るな？という忠告を無視し、彼女と結婚した。
そしてある日、パンドーラは好奇心に負け、開けてはならない箱を開けてしまう。するとそこからエリスやニュクスの子、疫病、悲嘆、欠乏などが飛び出した。パンドーラは慌てて箱を閉めたが、ある一つのものだけを除いて全て飛び去った後だったという。
この話は、人が作り出した物語でしかない。
だが、本当にあったか否かを決めることはできない。真実は、誰も知らない。
たとえ物語が違う結末だったとしても、知る者はいないだろう。
永遠に続く物語があるのなら、それは今この世のどこかに存在している。終わりを夢見ながら、未だにさまよい続ける者達だ。
そして皆、同じ使命を胸に抱いているのだ。

その箱の鎖に縛られた姫を、守り続ける。永遠に、命が朽ち果てても、ずっと――――。

第八部　ハジマリノウタゲ

「じゃあ、話そうか」
宇月はいつも通りの口調と笑顔を奏希に向けて話を切り出した。
居間で全員が真剣な面持ちで座っている。その中で、奏希は正座をしてそわそわと落ち着きがなかった。そして時々隣に座っている炬の髪を見ていた。
（髪の色がもとに戻ってる）
それは炬の髪の色が赤からもとの赤茶へ戻っていたからだ。水野や碓氷の時もそうだったが、まるで夢でも見ているような気分だった。
「まず奏希には、昔話でも聞いてもらおうかな」
かすかな笑みを浮かべ、宇月はそう言った。
そんな宇月に、奏希はちゃんと説明してほしいと言おうとしたが、この話も大切なのかもしれないと思い、口を閉じた。
そんな奏希を見た宇月はクスリと笑うと話を始めた。
「気が遠くなるような昔に、不思議な力を持つ女の人がいたんだ。彼女はある国の王と王妃の間に産まれた一人娘だった。そして、その国の巫女でもあった」
炬達も、何も言葉を発さず耳を傾けている。
「ある日、誰かによって開けられてはならない禁忌の箱が開けられてしまったんだ」
「え……」
それを聞いた奏希は宇月に教えてもらった？パンドラの箱？という話を思い出した。
「箱からは悲嘆などが飛び出して、その国を混乱におとしいれた」
奏希の心が、妙な高ぶりを感じた。
初めて感じる感情に、奏希は胸が一杯になった。
「そこで立ち上がったのが、その巫女姫と四騎士と呼ばれる従者だ

った。彼女の従者も変わった力の持ち主達で、巫女姫と悲嘆達を倒していった。でも、数を増やす相手にとうとう太刀打ち出来なくなったんだ」
緊張感あふれる空気に、奏希は知らず知らずのうちに顔が強張っていた。
「そこで巫女姫は最終手段に出た」
目の前にいる宇月の顔が、一瞬悲しそうに歪んだ。
「――……彼女は自分の命を使って、全ての悲嘆や犯罪などを箱に戻したんだ」
心臓が跳ね上がった。
話として聞いているだけなのに、なぜか異様に心が揺れる。悲しみとも憂いとも違う、何かが心を掴む。
奏希の胸中を知ってか知らずか、宇月は話し続ける。
「彼女は誰も住んでいなかった島に箱をやり、島ごと箱を封印したんだ。そして、彼女は俺達に永遠の約束をした――」
宇月は懐かしそうに笑って奏希を見ると、ゆっくりと口を開いた。
「ずっと、待っていたよ――シャルネロ」
宇月にじっと見つめられる。けれども見ているのは奏希自身ではない。瞳のずっと奥の方を見つめてくる宇月に、奏希はなぜか悲しくなった。
「っ――」
涙が目にたまると、あっさりと下に落ちていく。ぬぐっても止まらぬ涙に、奏希はおろおろと戸惑いを隠せないようだった。
そんな奏希を見ていた水野が、傍に寄ってきてそっとその涙に触れた。すると、奏希の涙はふよふよと宙に浮き、水野の指先の上で生き物のように動いていた。
奏希はそれを見ると涙を止め、うごめく涙の雫に見惚れていた。
水野の髪の色はいつの間にか空の薄い青のように染まり、目も澄んだ水色だった。
「あなたの中にシャルネロ様がいます。姫さんの魂の最初の持ち主

です。神に近いと言われたパンドーラの唯一の娘。僕はずっとあなたに会いたかったんです。――いいえ、僕の中の最初の魂の持ち主が……ですかね」

水野は愛らしく微笑むと、指先にある雫をポンと弾いた。

炬と碓氷はなにも言わず、ただ静かにそれを見ている。

「約束はずっと守られてきました。箱を管理し、巫女姫を守るのが僕らの役目です。……シャルネロ様の初めての生まれ変わりに、僕らの胸は高鳴っているんですよ」

水野は奏希の漆黒の髪に触れて、優しく笑みを浮かべた。そして、小さく？封（ふう）？と呟いた。すると涼しげな水色の髪が栗色に変わっていき、目の色も変わる。

その光景は幻想的で、夢でも見ているようだった。

その不思議を質問しようとしたが、先に水野が口を開いた。

「箱を飛ばした場所は、この日本なんです。その時の日本はまだ名前すらない離島でした。そして、その島というのは、この風鈴町全体のことなんです。これだけ言えばわかると思いますが、シャルネロ様が封印した箱というのはパンドラの箱で、その箱は、この風鈴町ごと封印してあるんです」

水野の話に奏希は頭がいっぱいいっぱいになる。まだ解決していない問題もあるのに、多くの情報が入りすぎて頭がこんがらがる。

とにかく奏希は簡単に頭を整理すると、水野の話に耳を傾けた。

「ですが、九年前、封印されていたはずの箱が開けられました」

九年前。その頃奏希はまだこの町に住んでいた。そして、箱。なにか覚えのある単語で、奏希は記憶を探っていた。でも思い出せない。

「お前が開けたんだよ。覚えてないのか？」

急に話に割り込んできた炬の発言に肩を揺らせ、奏希はむっとした顔を炬に向けた。

「覚えてなくて悪かったわね」

覚えていないのだからしょうがないと思った奏希はそう言った。

第一その箱という存在が信じられないのに、自分が開けましただなんて簡単には言えない。
「箱は封印した本人にしか開けられないからね。でも、その箱を開けたことで奏希の力は開花したはずなんだけど……なにも覚えていないみたいだね」
宇月の言葉に奏希の頭の上にはハテナマーク。力とか、そんなものが自分にあるのだろうか？　今自分の周りにいるこの四人は、なんらかの力を持っている。だが、目の前でその力を見たというのに未だに信じられない。なぜなら、普通じゃないからだ。
「俺達は四騎士の生まれ変わりなんだ。だから力を持って産まれてくる。その代償は大きくて、その力に耐えられず、母親は死んでしまう。だから、俺達には母親がいない。でも、奏希は違う。生まれた時は普通の赤ん坊だ。箱が開けられない限り、力は開花しない」
ならば、今の奏希は力が開花した状態となる。
その箱が開けられたという話を聞けば、そこに達するだろう。だが、そんな自覚は一切ない。
しかし、奏希はそんな話よりも母親が力のせいで死んでしまという出来事の方が、衝撃的だった。
自分の力で一つの命を奪うというのはどれだけの苦悩があるのだろうか。そんな力を持った自分が、おかしいのではと苦しんだ時期もあっただろう。
奏希はまるで自分の身に降りかかってきたことのように心を痛めた。
「そーいや物心ついた頃から、もう頭の中で昔の記憶が流れ込んできてたな。あれはつらかった」
炬は手で自分を仰ぎながら緊張感のない口調で言った。
「あのパンドラの記憶か――」
ここで初めて碓氷が口を開く。
宇月はそうだねと頷くと、さっと心の切り替えをしてきた。
「まぁ、奏希が箱を開けてしまったのは確かだね。箱の中の悲嘆達

は一番初めに箱を開けた本人をねらうし」
宇月の言葉に、奏希は無意識のうちにあごに手をやる。
（箱を開けた本人を――ねらう？）
まず、悲嘆とは具体的にどんなものなのだろうと考える奏希だったが、どう考えても形のあるものではない。
奏希の考えていることを見通したのか、宇月はゆっくりと話してくれた。
「悲嘆はさっき外にいた化け物の事。俺達はコキュートスって呼んでる」
奏希がなるほどと頷くと、宇月は先ほどの話に路線を戻した。
「そのコキュートスは、人に憑りつきその者の悲しみを食べて成長する。だから、憑りついた者に不幸を呼び寄せる。奏希は箱の中の不幸に憑りつかれたんだよ」
奏希は眉を寄せる。
何にも覚えがないのだから、当然ともいえる。それに、憑りつかれるとはどんな感じなのだろう。
「実際、奏希の両親は死んでしまってる。事故という事になっているが、悲嘆（やつら）達の仕業だ。そのことで、奏希は心を失ったからね――」
それを聞いた奏希は目を見開く。
鈴虫の鳴き声が、今はとてもうるさく感じた。

第八部　ハジマリノウタゲ（後書き）

長いので途中で切ってます。

第九部　ハジマリノウタゲ

奏希の中に、混沌が生まれる。
感情に飲み込まれそうになる。こんなことは初めてだった。
いつの間にか強く握り締めていた拳の中に、爪が食い込んでいった。
そんな奏希を見ていた水野が、どこか落ち着くような声で言葉をかけてきた。
「悲しみや憎しみは奴らを呼び寄せます。ここには宇月さんの結界がはってありますが、外では無防備な状態です。でも心配はいりません。僕達が、あなたを守りますから」
その言葉は、ただ身体を守るという事だけではないとわかった。心も、支えてくれる。そう、水野の目は言っていた。
奏希はその言葉で収まりつつある自分の感情を、体に染み渡らせることで感じ取っていた。
「おそらく、奏希は自分の力で記憶を消したんだ。悲しみを吸い取られる前に、よみがえったパンドラの記憶も……両親の記憶も」
宇月が小さく言ったそれに、奏希は目線を下へと落す。
「……きっと違う。私がその悲しみに耐えられなかったから、心が弱かったから、記憶を消したんだと思う」
奏希の言葉に、皆が顔をそろえてこちらを向いてくる。
そんな彼らと目線を合わせると、奏希は未完成の笑顔を向けて言った。
「その話が、本当なら……ね」
しばらく魅入ったように奏希を見ていた四人は、彼女が痺れた足を斜めにしたことによって我を取り戻した。
「へへ、足がピリピリする」
先ほどまでの心の荒れが嘘のよう引いていっている奏希は、そんな自分に驚いた。これは、成長している証かもしれないと思った奏

希は、次にずっと不思議だったことを質問してみた。
「ねぇ、どうしてさっき髪の色とかが変わってたりしてたの？」
それを聞かれた四人は、すっかり忘れていたというような顔をした。
それほどまでに、彼らにとってそれは当たり前なことなのかもしれない。
「僕らは？今？という時代に生きている人間であって、パンドラの時代に生きていた者ではありません。力を除けば普通の人間です。ですから、今僕等が所有している力は、パンドラの時代に生きていた人達のものなんです。ですから、その力を引き出すときには、僕等の最初の魂の持ち主である人の特徴が出るんです。でも――」
水野は奏希に向けていた瞳を、おもむろに宇月へと向けた。
「宇月さんは例外なんです。封を解かなくても、力を出すことができるんです」
「封？」
出てきた言葉を復唱すると、炬が次に説明を始めた。
「俺達は力を出し続けてると、その力に耐えられなくなって体が壊れる。だから封をしてあるんだ。力を使いたいときだけ解放する。けど……宇月は封をしないまま生活してんだよ」
投げやりに言う炬は、そのことを結構気にしているらしい。言葉の端々に、宇月への羨ましさが滲み出ている。
「封をしてないことはないよ」
さらりと言った宇月の言葉に、奏希を除く男三人が驚いた表情を見せる。
「っんなこと一度も聞いたことねぇーよ！」
うるさく立ち上がった炬に、宇月は相変わらずにこにこ笑って言葉を発する。
「あれ？　言ってなかったっけ？　俺にだって封はしてあるよ。――まぁ、してるっていっても力の半分をだけどね」
炬は唖然と宇月を見た。水野もかわいらしい表情でほけっとして

いる。碓氷は眉を動かす程度で終わったが、内心は狼狽えてるに違いない。
奏希はそんな三人をキョロキョロと順番に見ながら、入っていけない会話の理解をしようとしていた。
「じゃあなんだ！　宇月あんなにツエーのに、封を解くともっと強くなるってのか！」
冗談じゃないという様に感情をぶつける炬は、相当それが羨ましいのだろう。
「まぁ、そーゆーことになるのかな。……でも、君達だってもっと強くなれるんだよ。まだ完全には力を操れていないからね」
宇月は三人に笑いかけた。
そして次に、なぜか一人置いてけぼりをくらっていた奏気に、宇月は声をかけた。
「奏希、一番大事なことを言い忘れていたみたいだ」
笑みのはりついていない顔が、奏気に向けられる。
人形のように端整な顔立ちをしていると一目見てわかるそれに、奏希は見惚れかけた……が、次の言葉でそんなことは出来なくなっていた。
「奏希は悲嘆（やつら）に命を狙われているよ」
「！」
現実味のない言葉。だが宇月の表情が、嘘ではないと語っている。
急に血の気が引く体に、奏希は目を見開いた。
「悲嘆（やつら）はこの町にはってある結界のせいで、風鈴町以外の場所には行けない。沢山の悲しみが広がっているというのに、ここから出られない。そして、その結界をはった魂の主を殺せば、自由になれると、悲嘆（やつら）は知ってしまった」
心臓を鷲掴みにされたような息苦しさに、奏希は目線をうろつかせる。
「あ、あの化け物は……結界の外に出られないんでしょ？　なら、どうして私をここへ呼んだの？」

その問いに、答えたのは碓氷だった。
「俺達はこの町から出られない。遠い約束のせいでな。そして、お前は頼れる者もなく、独りになった。宇月はそんなお前を思ってここに呼び出したんだ」
奏希は言葉を失った。
優しさを向けてくれた相手に、攻めるようなことを言ってしまったと気づいた奏希は、宇月を真っ直ぐと見つめた。
優しい笑顔を向けてくれる宇月は、奏希を許していた。
そんな温かさに、奏希は涙を流す。？この町から出られない？という碓氷の言葉も、涙を流す理由にあった。
奏希が体験した楽しいことや、面白いことを、この四人は何も知らないのだ。自分の魂が昔したという、約束のせいで――。
奏希は掌に落ちた雫を見ながら、彼らの心の傷を察するように泣いた。
「それだけが理由じゃないんだよ」
かけられた言葉に、奏希は涙を拭いて宇月を見た。
「悲嘆（やつら）はこの町から出られない。けど、力で外の者を傷つけることが出来る奴が現れてきた。……奏希のおじいちゃんとおばあちゃんが死んだのも、悲嘆（やつら）の仕業だ」
「！」
奏希は頭が真っ白になった。
祖父祖母も、両親と同じくあの化け物に殺されたなんて、思いもしなかったからだ。
幸せを奪い、悲しみを引き寄せる化け物。
奏希は心に空いた隙間を埋めるように、自分の体を強く抱きしめた。
「奏希の住む家に力を放ったんだろうけど、ちょうどその時奏希はいなかった」
奏希は自分の体を小さく丸めると、目をつぶった。その事実から、遠ざかるように、強く。

（私があの家にいたせいで？）
自分が殺してしまったようなものだと自分を責める奏希は、幼い子供のようだった。
「だからここに呼んだんだ。この家は結界があって安全だし、コキュートスも夜にしか動けない。なにより、俺達が傍で守ることが出来る」
宇月はうずくまる奏希に手を伸ばし、温かい掌を頭にのせて撫でた。
一瞬体を強張らせるものの、奏希はその手に安心を覚えた。そのせいなのか、またポロポロと涙が流れる。
「今日はいっぱい泣いて、明日を迎える準備をしなきゃね」
優しく囁かれた言葉は、奏希の心を少し軽くしてくれた。

第一部　記憶の中の記憶

深い森の中、一人の少女が目の前にある小さな木の小屋に入って行った。
隙間のあいた木の床は、足を進めるたびにきしきしと音をたてる。
さみしいその部屋の中に、一つの箱があった。
この小屋には不似合いなほど美しく、魅せられる箱だ。
さまざまな宝石がちりばめられ、箱の中心にはエメラルドグリーンの石がはまっている。
少女は目を輝かせながらその箱に近づくと、しゃがみ込んで箱に手をかけた。
手に感じる重さは意外にも少なく、少女はあっさりとそれを開けてしまった。
それが、一度終わりを告げた物語を、再び始めるものとは知らず――。

鳥のさえずり、そして差し込む光。そんな穏やかな中で、奏希は目覚めた。
体を起こすと窓から見える景色を見つめ、ゆっくりとそちらに向かった。
バルコニーに出ると風が奏希を向かい入れ、朝日が元気を分け与えるように奏希を照らした。
「……？」
奏希は景色を見ていた。見ていたのだけれども何か違和感があった。
柵につかまり身を乗り出して深い緑の森を見ていた奏希に、いきなり声がかかった。

「おい、落ちるぞ」
「きゃぁぁ！」
予想もしなかったことで、奏希は露骨に肩をびくつかせ、バランスを崩した。だが、気合で踏ん張りなんとか落ちることはまぬがれた。
「な、何よ急に！　危なかったじゃない！　声かける時は事前に気配を発しなさいよ！」
まだ不規則に鳴る心臓を真似するように、声が荒々しく声の主に浴びせられる。
奏希が振り返った先には、炬がいた。
朝日を浴びながら、腕を組んで壁に寄りかかっている様は、黙っていればいい被写体だ。
「第一どっから湧いて出たのよ！　幽霊ってあだ名、あながち間違えじゃないんじゃないの！」
その言葉に、炬の額に血管が浮き上がる。
「ふざけんじゃねーぞ！　このアマが！」
体を壁に預けていた炬はそれを止め、奏希の方へと詰め寄って行った。
「黙ってきーてりゃ言いたい放題かよ！　口を開けば俺をけなすことばっかり言いやがって！　昨日助けてやった礼ぐらいは言ったらどーなんだ！」
それを聞いた奏希は感じていた違和感の正体が分かった。
炬の声につられるようにして、左隣の部屋から目を擦りながら出てきた水野に気づき、奏希は炬をほったらかしにして、水野の方へと足を向けた。
「ねぇねぇ水野君！　あれどうなってるの！」
奏希は生い茂る森の木々達を指して水野に近寄った。
いきなり声をかけられた水野は目を丸くしたものの、奏希が指す指の方向へと目を向けた。
だが、寝起きの水野の頭はきちんと働いていないようで、奏希が

何を言いたいのかさっぱりのようだった。
そして、相手をされなかった炬と言えば、ぶつぶつ文句を言いながら自分の部屋に戻って行ってしまった。
「あのね、ほら、昨日の……コキュートスっていう化け物！　あの化け物が荒らした木とか、へこんだ地面とか、元通りになってるの！　炬が燃やした木とかも……」
自分の言葉に奏希はハッとした。
昨日体験したことは、全部夢だったのではないかと。あんな非違現実的なことは、きっとありえないと。
言ったことを後悔した奏希は、恐る恐る水野を見た。おかしな目で見られていたらきっと心が折れる。
だが予想に反して、水野の表情は眠そうな笑顔だった。
それに奏希はホッとするが、昨日のことが現実なのだという確認にもなって、体が震えあがった。
「コキュートスは、もともと形がないものですから、倒せば戦いの痕跡はなくなるんだと思います。悲嘆や失望感なんていう負の存在は、目に見えませんよね。だからだと思います」
水野自身もそこらへんは曖昧のようで、言葉を濁す説明となったが、次の説明は、確信に満ちていた。
「僕達が壊してしまったものが元通りになるのは、この世に存在してはいけない力で戦っているからです。もしその力を認めてしまうとこの世は荒れてしまいます。きっと、神様がそれを分かっていて下界を綺麗にしてくれているんでしょうね」
最後の言葉は冗談かそうでないかは解らなかったが、説明はなんとなく理解できた。
ただ、この世に存在してはいけないという自虐的な水野の言葉に、奏希は心の中で悲しくなっていた。
一向に口を開かない奏希に、水野は笑いかけて言った。
「まだ少し疲れが残っているんで、休みますね」
水野はぺこりと頭を下げると、自分の部屋へと戻って行った。

奏希はそれを見送り、再び緑と青が広がる景色に目を向けた。
（力を使うと疲れるのかな？）
一人では答えが出ないことを考えながら、奏希は輝く光と向き合っていた。
これから何をすべきなのか、そんなことも考えなければいけない。
頭の中はいっぱいいっぱいだったが、奏希はそれでも努力しようと誓った。
まだ全てを信じられるようになったわけではないが、これから先待っている、未来の為に――。

第二部　記憶の中の記憶

「巫女姫が戻ってきたみたいね」
じめじめとした暗い森の中、絡みついてくるような声がした。とても綺麗な声なのに、その本質はとても恐ろしいものだとわかる。
闇の中から出てきた女は揃えられた長い緑の黒髪をなびかせ、紅の唇に蠱惑的な笑みを浮かべた。
美醜。
そんな言葉が誰の脳裏にも浮かぶだろう。
負の感情を我が身にまとった女は、それをも武器にしてしまうような圧倒的な雰囲気を持っていた。
太りも痩せてもいない体のラインを隠さない服は、赤と黒で色づけされている。鎖を絡ませた肌は白磁。左腕には白く小さいセイロン・ライティアの花が刻まれていた。
「きっと箱を探すでしょうね」
その女から少し離れた木に、淡いすみれ色の髪をした少年が寄りかかっていた。通った鼻筋に、優しそうな瞳。整った顔は微笑みがよく似合う。だが、どこか愁いを帯びた雰囲気は、彼を儚げに見せた。
「そうね……白夜（はくや）、巫女姫に会いたい？」
何か探るような口調で言われた言葉に、白夜（はくや）と呼ばれた少年は、小さく笑って暗雲とした夜空を見上げた。
「セルメイン様。それは言わずともわかるでしょう」
慈愛に満ちた表情が、答えを物語っていた。
セルメインはそれを見ると面白くなさそうに鼻を鳴らし、鎖がこすれる音と共に白夜の近くに寄った。
「苛つくわ。あの女を思い出すだけで虫唾が走る」
セルメインは冷徹な瞳で白夜と同じように夜空を見上げた。

嫉妬、憎悪、悲憤。負の感情が彼女中心に渦巻くように風が荒ぶる。

彼女が浮かべた笑みには醜悪が漂っていた。

第三部　記憶の中の記憶

賑やかな商店街。そこは笑い声が飛び交う素敵な場所だ。
太陽の光に照らされながら、奏希は宇月と共にブロッサムロードを歩いていた。蝉時雨が降り注ぐ中、奏希が手で風を仰ぎながら宇月に話しかけた。
「暑いねー。雨が降ってくれれば少しは涼しいのに」
奏希が風鈴町に来てから約三週間、雨は降っていない。気候に変化はないが奏希自身には変わりがあった。それは、この生活に順応しつつあるということだ。
八百屋で足を止めた奏希と宇月は野菜を見ながら会話をする。
「そうだね。ここ最近降ってないから涼しさが恋しいよ」
笑顔で言った宇月は次に、手に取った野菜を買うべく店主のおじさんに声をかけた。すると店主は笑顔でそれに応え、こちらに近寄ってくる。
「あ、宇月兄さん。これも」
奏希は手に持っていた野菜を宇月へと手渡した。
会計を済ませると賑やかな商店街を抜けて、奏希達は孤立した場所にある自分達の家へと足を進めた。
「早く帰らなきゃ野菜傷んじゃう」
必然的に早歩きになる奏希に付いていく宇月はクスクスと笑っていた。
「雪に来てもらえばよかったかな？　そうすれば氷で冷やしてもらえた」
相変わらずの微笑みを浮かべて言った宇月に、奏希は小さくため息をつく。
「それだけのために連れてこられたんじゃ、碓氷君が可哀相」
少しずつ異物の力を認めつつある奏希は何の違和感もなく言葉を

返す。
宇月は微笑むと前を向いた。聞こえるのは風が緑の木を揺らす音だけだ。
「ねぇ、奏希」
宇月に声をかけられ奏希は大きな瞳をその声の主へ向けた。
笑顔を崩していない表情だったが、様子が少し違った。真剣な宇月の眼差しは、あの化け物を目にした日以来だった。
「奏希に頼みたいことがあるんだ」
それを聞いた奏希はその先を促すようにゆっくりと頷いた。
あの事件の時から化け物にはもう会っていない。そしてその話も皆あまり触れないようにしてくれた。それはきっと奏希の為だ。受け入れるまでは時間が掛かる。それを配慮してくれてのものだった。
「……パンドラの箱を――探してほしい」
その言葉に奏希は進めていた足を止めた。
どうして私が？　と聞きたかったが、それを口から発せなかった。またあんな怖い思いをするかもしれないと思うと、体が怖気あがる。
そんな奏希をみた宇月はゆっくり近づいてきて気にかけるように顔を覗いた。
「ごめんね。あまりこの件には関わらせたくなかったんだけど、そうもいかない状況になったんだ。奏希がここに戻ってきたことで、コキュートス達がざわつき始めている。……ここ数週間で憑りつかれる人の数が急増したんだ。きっと、憑りついた人間を使って奏気を探しだすつもりだ。少しずつ倒していっているけど、そろそろ俺達だけじゃ限界が近い」
奏希は息をのみ、宇月の目をじっと見つめた。
奏希の知らないところでどんどんと悪い状況になっている。そのことにも不安が膨れ上がってくる。そして、知らず知らずのうちに守られていたことにも、奏希は驚嘆していた。
「俺達だけじゃ手におえない。奏希の力も貸してほしい」
面持ちが真剣になった宇月に、奏希は戸惑いを見せる。

「箱は……どこにあるかわからないの？」
奏希の質問に、宇月は頷いた。
「だから奏希に探してほしい。箱がどこにあるのかは箱を封じたシャルネロの生まれ変わりである奏希がわかるはずだから。それにその箱を開けられるのも奏希だけ」
そう言われた奏希はますます戸惑うことになった。自分だけだと言われたら、断ることは困難だ。
「箱を見つけたら……どうするの？」
小さな声でそう言うと、宇月は奏希を落ち着かせるように柔らかな声で言った。
「悲嘆をその箱に再び閉じ込める。上手くいくかはわからないけど、俺達が一匹ずつ消していくよりはいい」
下を向いた奏希の目に映ったのはコンクリートの表層。頭のてっぺんから浴びせられる太陽の光をうけて首筋には汗が伝う。
返事が出来なかった。
複雑な感情が入り混じって頭が混乱する。恐怖を植え付けられたからという理由だけでは断れない。奏希がやらなければ人々が負の渦にのまれてしまう。そして何より、大切な人にこうもお願いされているのだ。
言葉が絡まる奏希に宇月は優しく笑って声をかけた。
「今すぐ返事をもらえなくてもいいんだ。だから……家に帰ろう。野菜が傷む」
右手に持った袋を持ち上げた宇月を見て、奏希は首を頷かせた。
もう後戻りは出来ないものだと思った。それでも、いざとなるとすぐにうんとは頷けなかった。誓った努力は恐怖へ塗りつぶされていく。
奏希は自分の弱さを実感しながら重い足を前へ進めて言った。

第四部　記憶の中の記憶

夢を見た。とても懐かしい夢。でもそう思うだけで記憶には存在しない。

森の奥に進むと一人の男の子がいた。薄紫色の髪と瞳は美しく、微笑む姿は愛らしい。男の子は手を伸ばし、その手を掴むよう言ってきた。言われた通り、その透き通った綺麗な手に自分の手をのせると、男の子は歩き出す。

しばらく歩くと傷んだ小屋が、一つさみしくぽつんと立っていた。男の子はその小屋を差すと静かに言った。

あそこから声がするんだ。ここから出してって。

軋む木の音を聞きながらドアを開けると、そこには見たこともないような美しい箱があった――。

目が覚めた奏希は肌に不快を感じて起き上がった。汗がまとわりついて気持ちが悪い。

外はオレンジ色に染まり、綺麗な夕方だ。

ベッドに倒れ込んで宇月からの頼みについて考えていたら、どうやら眠ってしまったらしい。

奏希はベッドから抜け出すと、階段を下りて行った。そして家の誰にも行先を伝えず外へと飛び出した。

夢のことが気になって、考えるよりも先に体が動いていたのだ。もう夢の中に出てきた男の子は記憶の中から薄れつつあった。あの小屋へと続く道も忘れないように、奏希は急ぎ足で森の中に入って行った。

道のない森の中、奏希は辺りを見回し走り続ける。
奏希を案内するように風が背中を押し、木が道をつくるように体をしならせる。
夢で見た小屋が、森の中にあるかもしれない。そんな気がした。なにか宇月達の力になれるのではないかと思い、奏希は必死に森を駆ける。
だが、森を突き抜けたどり着いた先は、風鈴町を一望できる丘だった。
奏希は立ち止まり、走る心臓を整えようと深く息を吸った。そんな時、誰かの声が余計に奏希の心臓を落ち着かなくさせた。
「こんにちは、お嬢さん。こんなところでどうしたのかな？」
露骨に肩を揺らせて後ろを振り向くと、そこに居たのはすみれ色の髪と双眸を持った、見目麗しい少年の姿だった。浮かべられた笑みは優しげで、好印象の持てる相手だ。
美少年を目にして瞬きひとつせず相手を見ていると、少年は子供っぽい笑みを見せて近づいて来た。
「ふふ、面白い顔」
その言葉に我を戻した奏希は顔を引き締めた。その行動にも、少年は屈託のない笑顔を見せてくれた。
間近に見ると恐ろしいほどの美貌を持つ少年だった。顔の整い方は宇月と同じ部類のものだ。まつ毛が長く、輪郭はシャープ。女性と言っても疑われないだろうその相貌は、この世のものとは思えない。
「僕の顔に何かついてる？」
透き通った声を聞き、奏希は自分の心臓が不規則に高鳴るのを感じた。
咄嗟の返事は首を横に振ることで対応したが、相手が気分を悪くしないか気になった。
「そう、よかった」
少年は笑みを浮かべた。

それに安心した奏希は硬い表情を崩し、小さく微笑んで見せた。
「……ねぇ、ここから見える景色って、とても綺麗だよね。よくここに来るんだけど、全然飽きないんだ」
少年が目線を向けた先に奏希も目を向けると、見えたのは淡いオレンジに照らされる風鈴町の姿だった。
急いで走ってきた先ほどの奏希には、こんなきれいな景色を見る余裕がなかったので、改めてみると本当に美しかった。
その自然と人工とが繰り出す見事なコンビネーションに心奪われた奏希は、照らされる光景を飽きることなく見ていた。
「夜になる前のこの少しの間がもっとも綺麗なんだ。僕はこの時間帯が一番好き」
いつの間にか奏希の横に立って並んでいた少年に目を向けた奏希は、そうだね　と一言呟いた。
青い海は夕焼けでオレンジ色に染まり、人を感傷的にさせる。だが逆に、人を落ち着かせ、心を解かす力も持っていた。
奏希は躊躇いがちに少年を見ると、言葉を発した。
「あなたの名前は？」
それを聞かれた少年は奏希に笑いかけ、髪を風になびかせながら言った。
「白夜（はくや）」
その名前を聞いた奏希は、この少年にピッタリの名前だと思った。
奏希は自分も名乗ろうと口を開くが、白夜が唇に人差し指を当てたことに目を丸くした。出かけた声が奥へと引っ込んでいく。
「奏希」
「！」
「君の名前は奏希」
名前を呼ばれ、奏希は驚愕の色を浮かべる。そして、警戒心が徐々に湧いてくる。
「僕は君を知ってるよ。儚く脆く、その命を散らせた……」
風が荒ぶり、奏希の緑の黒髪を巻き上げた。

「巫女姫――」
「！？」
白夜の言葉が奏希の体の自由を奪う様にして紡がれた。だが、白夜は何もしていない。
奏希は足を後ろへと引こうと思ったが、それが出来なかった。
そんな奏希を見た白夜は愁いに似た笑みを見せた。
「大丈夫だよ。何もしないから。今日は」
不安を胸に奏希が白夜を見ると、相手は変わらず心を穏やかにさせてくれるような笑顔を向けてきた。
白夜は奏希に背を向けると、ゆっくりと森の方へと歩き出した。
「そうだ。あと一つだけ忠告」
立ち止まった白夜は顔だけこちらに向け、口を開いた。
「一人の時は気をつけて。奴らが君を狙っているよ」
それだけ言うと、白夜は森の中へと姿をくらませた。
奏希は緊張の糸が切れたのか、土色の地面へと座り込んだ。
少しずつ、動き始めている。生活を変える何かが。人生を変える何かが。奏希を変える何かが――。

第五部　記憶の中の記憶

奏希は森を彷徨い歩いていた。自分がどこへ進んでいるのかすら分からない。

自分がもう普通の生活をおくれないと改めて知ってしまったからか、どうすればいいか分からなくなり、迷いが生まれる。

奏希は森の中に数人の人影を見つけて立ち止まった。こんな森の奥深くに自分以外の人がいることを不思議に思った奏希は、隠れる判断をした。

気配がこちらに来るのが分かり、それと同時に肌に突き刺さるような殺気を感じた。

奏希は息をのんだ。

人であるが人でない化け物に操られた人間。悲しみや苦しみ、負の感情に付け込み人を脱落させる化け物。

奏希は近づいてくる気配から逃げようと足を前へと踏み出した。

だがその瞬間、奏希は何かに押し倒され、地面へと体を叩きつけられた。首には力強い何かが気道を潰し、息が出来ない。

奏希がうっすらと目を開けると、目を赤くらんらんと光らせた女の姿があった。

無数の足音が聞こえ、奏希の周りに人が集まる。だがその誰もが奏希を助けることなく、赤々とした目を向けてくるだけだった。

「っ……！」

奏希は首を絞めてくる相手の腕を掴み、引きはがそうとするがビクともしない。女の力とは思えないほどの圧力に、奏希の意識は段々と遠のいていく。

その時、地を蹴る音と炎が燃え上がる光景が見えた。

赤い炎が人々を包み込んでいく。だが、その火で重傷を負うものはいなかった。

奏希の首を絞める女の手が緩んだと思うと、その女は誰かの手によって奏希から引きはがされた。
「ったく！　一人でのこのこ出歩いてんじゃねぇよ！」
赤い瞳が奏希を覗き込む。けれどその赤は冷たい色をした赤ではなく、情熱的に燃え、奏希を心配そうに見る赤だった。
「か、がり」
炬は奏希の声を聞くと、ひとまず息があることに安心したのか表情が少し柔らかなものになる。けれどもまだ状況は悪い。
炬は奏希を抱えると、立ち上がってきた冷たい赤の目をした人々を睨みつけた。
「めんどくせーことになったな。こいつらに罪はないし、手を出しずれーんだよな」
そう言いながらも炬はあいている手の方に拳を作り、敵の方へと駆け出した。
「ちっとそこで寝ててもらわねーとな！」
炬は一人ずつ、確実に一発で獲物を仕留めて言った。
数人いた人は地面に倒れていき、眠るように目を閉じていった。
片が付くと炬は走り出し、森を抜けたコンクリートの道で止まった。
「バカかお前は！」
開口一番、炬から出た言葉がそれだった。
「あんなとこ一人で歩いてたら狙われるに決まってんだろ！　行くなら俺達に言うか、もっと人気のあるとこ行けよ！」
炬はまき散らすようにその言葉を言うと、奏希の手首を取って歩き始めた。苛立ちのせいからか、歩くスピードが速い。
奏希は謝るタイミングを逃し、手を引かれるがままに前へと進んでいた。
「！」
奏希の体が前へ進むことを止めた。それに伴い炬は奏希に引き止められるような形になって足を止めた。

「まただ……」
奏希は小さくそう呟いた。それを聞き取った炬は、奏希を怪訝そうな目で見る。
「何がだ？」
自由な方の手を耳に当てた奏希は、そっと目を閉じた。
「声……声が聞こえるの」
「？」
その言葉に炬も耳を澄ませてみていた。だが聞こえるのは穏やかな風の音と、時折鳴く鳥の声だけだと悟ったのか、炬は奏希の方を見た。
「何も聞こえないぞ」
炬がそう言っても、奏希はどこかに耳を傾けたままだった。そして、しばらくしてから躊躇いがちに言葉を発した。
「……小さい頃から人には聞こえない声が聞こえたの。でもそれは本当に小さくにしか聞こえなくて、そうゆう生活にも慣れてるつもりだった。でも――」
奏希は瞳を炬へと向け、静かに言った。
「この町に来てから、その声がはっきりと聞こえるようになった」
そう、奏希はこの町に来てから、その声の存在が大きく聞こえるようになっていた。
自分の前世や炬達の存在を知って、本当は嬉しかったのかもしれない。救いになったのかもしれない。自分が人には聞こえない声が聞こえるように、他にも普通ではない人達がいたということに。でも、それを否定し続け受け入れないのは、奏希自身が普通でありたかったからかもしれない。
炬はしばらくすると、奏希に質問を投げかけてきた。
「……どんな声がするんだ？」
炬の瞳が真剣に奏希を見る。
それを聞かれた奏希は一度下を向いてから、炬と目を合わせた。
「悲しくて、辛い、苛立ちもある負の声」

問いに答えた奏希に、炬は顔を一瞬強張らせると、奏希の腕を引っ張って再び歩き始めた。先ほどより強引に腕を引っ張る炬に、奏希は何も声を発せなかった。

「……？悪魔の囁き？だ」

「え？」

炬が呟いたその言葉に、奏希は聞き直すようにして声を出した。

「お前が持ってるその力のことだ。俺達はそう呼んでる」

炬の背中しか見えないので、その表情は分からない。だが、どこか声が沈んでいるような気がした。

「力？」

疑問を解消しようと声をかけていくと、炬は丁寧に答えを返していってくれた。

「巫女姫……シャルネロが持っていた力だ。人の心の底にある負の感情を、言葉として聞くことが出来るものだ。ちっ、まさかもうその力を引き出してるなんて！」

苛立たしげに言われた最後の言葉の理由は、奏希にはわからない。なにか悪いことでもあるのかと考えるが、そんな風に悪いことばかりを考えるのはやめた。

奏希は炬に腕を引かれながら蝉の声に耳を傾けた。人の負の感情が聞こえないように、その感情が、自分に乗り移らないように。

奏希は目を、茂った森の方へ向けた。さっき襲われた時も、涙が出てしまいそうなほどの悲しい声が聞こえた。助けて、助けてと叫んでいるのに、誰も救いの手を差し伸べてはくれないと嘆いていたのだ。言葉だけではない、感情も、自分の中に流れ込んできた。締め付けられて胸が痛くなり、溺れるような戦慄。

「早く帰るぞ。またあいつ等が出てくるかもしんねぇーからな」

そう言った炬の声は、暗く響いていたような気がした。

第六部　記憶の中の記憶

あいつに力があるという事に驚かなかったと言ったら嘘になる。
予想はしていた。力が芽生えつつあるのではないのかと。だが、実際はそんな生ぬるい状況ではなかった。
力は予想をはるかに超えて大きくなっていた。
できれば力を持ってほしくはなかった。自分と同じ運命をたどってほしくはないからだ。
決められた運命に、縛られてほしくなかった。
だがもう遅い。
運命は動き出す。壊れた歯車が、再び回り始めるように――――。

夜が来て、鈴虫が鳴く。
風が暑さを中和して、不快感は昼間よりは無い。
居間に集まった者達の顔を見回しながら、奏希は黙って様子をうかがっていた。
「……そうか、？悪魔の囁き？がもう……」
深刻そうな顔をする宇月に、奏希は言葉を返すことなくただ見ているだけだった。いや、何も言えなかったのかもしれない。
「でも、今のところその力が害をなしているわけではないんでしょう？　それなら僕は大丈夫だと思いますけど」
水野は宇月とは違い、そんなに深刻だとは思っていないようだった。奏希も実はそうだった。今までなにも起こりはしなかったのだから、これからも大丈夫だと思うのだ。第一、この力を持って何か悪いことが本当に起こるのかが分からない。異物な力であることは認めるが、悪い影響があるとは考えられない。
「姫宮、お前はその力を操ることは出来るのか？」
「え？」

そんなことを考えていると、碓氷が奏希に質問をしてきた。
奏希は一瞬質問の意味を頭で整理してから、口を開いた。
「操るって……どんな風に？」
それを聞いた炬が、机に頬杖をしながら言ってきた。
「ま、要するに、負の声をシャットダウンできるかってことだ。聞きたいときに聞くって感じだな」
奏希はそれを耳にして、目を丸くした。
「な、何それ！　そんなこと出来るの！？」
その反応に、周りの者達は質問の答えを悟った。
「まだ操ることが出来ないのならば、注意が必要だな。ここは他と違って負の感情が多すぎる。強すぎるものだってある。その感情に飲み込まれてしまわないとは言い切れない」
碓氷の納得がいく説明に、奏希は考えを改めさせられることになった。
「とにかく、奏希はまずその力を操れるようにしなきゃいけないね」
柔らかく笑いかけてきた宇月の笑顔は、いつも通りの笑みだった。
奏希は小さく頷き、宇月を見た。
「兄さんたちの声は聞こえないの」
ふと思ったことを言ってみると、宇月が笑って答えてくれた。
「巫女姫に心を読み取られないように、昔の俺が四騎士に心の結界を張っておいたんだよ」
そんな力もあるのかと感心した奏希に、宇月はクスリと笑っていた。
奏希は皆の顔を順番に見てから、おもむろに立ち上がった。
「みんなの分のお茶淹れてくるね」
奏希は静かに襖を開け、その場を後にすると台所に足を踏み入れた。
冷蔵庫から冷えたお茶を取り出し、それを机に置くとコップを棚から出した。
人数分のコップを出し終えた奏希はそこに氷を入れてお茶を注ぎ

始める。
「姫さん」
後ろから声をかけられた奏希は、そちらに顔を向けた。
控えめに笑った水野がそこに居て、奏希も同じように笑った。
「どうしたの、水野君？」
奏希がそう声をかけると、水野は近寄ってきてにこりと笑った。
「姫さんと話がしたいんです」
純粋にそうなんだと思える態度に、奏希はきゅんとする。かわいい弟が出来たみたいでなんだか嬉しくなった。
「私も話してみたいなーって思ってたの」
奏希がそう言うと、水野は嬉しそうに笑った。
「あのね、ずっと聞きたいことがあったんだけど、聞いていいのかが分からなくて……」
奏希が躊躇いがちに口を開くと、水野は笑顔で答えた。
「なんでも聞いてください」
奏希は少し考え込んでから水野の方を向いて言った。
「水野君はいつからここにいるの？　お父さんとか許したのかなって思って」
母親がいないことは知っているので、そこにはあまり触れないよう配慮したつもりだ。奏希は水野の様子を目で確かめるように見ていた。
「僕は小６のときここに来ました」
「小６！？」
そんな時期からここにいたというのは、信じられない事だった。親元を離れて赤の他人の家で暮らすなど、奏希は考えられなかった。
「宇月さんが家に来て、僕を引き取りたいって言ってきたんです。当然そんなこと断りますよね。実際父はそうしてましたから。でも、僕は行かなきゃと思ったんです」
「え？」
その意図が分からなかった奏希は、咄嗟に声を発していた。

水野は柔らかく笑って話し始めた。
「その頃の僕はもうパンドラの記憶がありましたから、宇月さんについていくのが僕の運命だとわかっていました。だから、宇月さんには父と、それから兄の記憶から僕を消してもらいました」
「！」
それを聞いた奏希は声を出すことが出来なかった。
家族の記憶から自分が抹消されるなんて、なんて残酷なことだろうか。次に会うことがあっても、相手は自分を誰だか知らないということだ。どれだけの傷が、心につくのだろうか。
奏希はそれを想像して心を痛めた。
「そんなに気にしないでください。僕は自分の意志でそれを決めたんですから。あなたを守ることが出来るなんて、僕は今とても幸せですよ」
奏希が落ち込んでいるのを察した水野がそんなことを言った。だが奏希の心の痛みはひかなかった。水野の言葉が、悲しすぎるからだ。
「……他の人達もずっと昔からここに？」
奏希は俯きがちのままそう問うた。
「炬さんは中2のときにここに来ました。碓氷さんは結構最近で、高1のときですね。ここに来た経緯や、家族関係のこととかはわかりませんけど……」
奏希は口を結んだまま言葉を出さなかった。
多分、なんとなく分かってしまったから。あの人達の心の傷とか、ここにいる理由とか……。
外ではリンリン、リンリンと、鈴虫が鳴いていた――。

第七部　記憶の中の記憶

夏休みが終わる。
すなわち夏ももうすぐ終わり。そして学生は学校が始まる。
そしてここにも、例外なく学校へ通おうと朝の準備をしている者がいた。
「かわいー。やっぱりこの制服かわいいよ！」
自分の部屋にある鏡の前で制服姿の自分を見る少女は、どこにでもいる女の子そのものだ。黒い髪をなびかせ、上機嫌に鼻歌を歌う。
「ふん、馬子にも衣装だな」
「姫さんよく似合ってますよ」
「わー、女子高生だね」
「……」
一人新しい制服に心躍らせる少女、奏希の後ろに、突如四人の男が顔を覗かせた。
「か、勝手に女の子の部屋に入ってこないでよ！」
急に姿を現した男達に狼狽えた奏希は、赤面しながら四人の方にむいた。
「あ、ごめんね。全然降りてこないからまだ寝てるのかと思って起こしに来たんだ」
「……四人で？」
宇月一人が起こしに来るならわかるが、その他の三人もついてくる必要はないだろう。
「僕は姫さんの寝顔を見ようかと思って」
「え！　そんな爽やかな笑顔で言わないでよ水野君！」
「俺はお前の寝相の悪さでも見て笑ってやろうと思ってな」
「あんたはそういうことしか考えられないの！」
「……成り行き」
「あ、うん。そうだと思った」

そんな風に賑やかな朝を迎え、一日が始まる。
奏希は新しい学校への不安と希望を交差させながら、いつもとは少し違う今日を迎えることになった。
緑が茂る景色、青い空の下でなく蝉たち。立体的な風景を学校の窓から覗く奏希は、そんな朝の出来事を思い出していた。
「姫宮さん、入って」
茶髪のセミロングヘアーを持ち、大人の魅力を放つこの女性は、二年次の担任である。
そんな担任の先生である？五木　なつこ？に続いて、奏希はこれから自分の教室になる部屋へと足を踏み入れて行った。
「はじめまして。姫宮奏希です。皆仲良くしてください」
笑顔をキープして自己紹介をした奏希に、温かい拍手がかえってくる。そのことに少しほっとした奏希は、クラスの中を見回してみた。
（あ、碓氷君）
奏希は窓側の席の一番後ろにいる碓氷のことを見つけた。その表情はいつも通り無で、何を考えているのかはさっぱりわからない。窓の外を眺めている姿は、絵にかいたような美しさだった。
「じゃあ、姫宮さんの席は廊下側の一番後ろの席ね。周りの人達は姫宮さんにいろいろおしえてあげてね」
五木の言葉にそれぞれが返事をする。
奏希は指示された通りの席に向かい、そこに座った。
「はじめまして奏希ちゃん！　私、黒桜（こくおう）　雅（みやび）！　よろしくね！」
座った瞬間、前の席の女の子が後ろを向いて話しかけてきた。
艶のある黒髪は元気そうなショートの髪にそろえられ、笑顔は少し子供っぽい。活発そうな彼女は、まだ暑さの残るこの時期に、長袖のワイシャツを着ていた。
「うん、よろしく雅ちゃん」
「雅でいいよ！　私も奏希って呼ぶから！」
心地よいまでの笑顔を向けられ、奏希も自然と笑顔になる。

転校そうそう友達ができるとは、幸先がいいのかもしれない。
「それよりさ、なんでさっきからビミョーに右の方に体向けてるの？　そっち壁だよ？」
そう言われた奏希は、かすかに表情を濁した。
雅の言う通り、奏希の体は右側に向いていた。これはたまたまではなくわざとだ。
「いや、あの……。雅の左隣の人が……ちょっと苦手で……」
雅は左をちらっと見て、再び奏希に目線を戻した。
「炬？　知り合いなの？」
奏希はそれを聞かれ、あっまずいと思い、少しの間をおいてから頷いた。
（赤の他人と一緒に住んでるなんていえないよね……）
奏希はその場を笑ってごまかし炬を視界に入れないように努力した。
「あ、先生こっち見てる！　前向いて雅！」
五木の視線を感じた奏希は雅の背をポンとたたいて前を向かせた。
それからほとんど無意識に斜め前にいる炬に目を向け、すぐに戻す。
五木の話が終わると共にホームルームが終わり、皆おのおの行動をし始めた。奏希は後ろに振り返ってきた雅を見て、笑顔を向けているところだった。
「一限目は移動教室があるよ。場所教えてあげるから一緒に行こう」
にこにこしながらそう言ってきた雅に、奏希はその親切をありがたく受け取った。
夏休み中に送られてきた新品の教科書を鞄から取り出し、奏希は授業の準備をする。そしてその行動をとっている最中に、ふと気になる事ができた。
「……炬の周り、全然人がいなくない？」
そう、炬の周りには誰も人がいなかった。それだけならさして気にならなかったが、明らかに皆炬を避けているように見えた。

すると雅が先ほどとは違う、少し控えめな笑顔を浮かべながら言った。
「炬はね、入学早々上級生の人と喧嘩しちゃって……それで悪い噂が学校中に出回って、誰も近寄らなくなっちゃったの。なんでも何人もの先輩相手に一人で勝っちゃたみたいだよ。まぁ、当然謹慎処分だけどね。退学にならなかったのは運がいいよ」
その話を聞いて、奏希は黙り込んだ。
炬の性格なら喧嘩はあり得るだろうが、いくらなんでも入学早々そんな馬鹿な真似はしないだろう。まだ知り合って日が浅い奏希だが、そう思った。
一人で思案している奏希に、雅がゆっくりと言葉を発した。
「炬って、本当はいい人だと思うんだけどね」
宇月が前に言っていたことと同じようなことを口にした雅に、奏希は眉を寄せた。
炬の意地の悪い面しか知らない奏希は、とても？いい人？とは思えないようだ。次はそのことについて考え込む奏希だったが、答えは出ず、諦めて止めていた手を再び動かし始めた。

第八部　記憶の中の記憶

奏希の学校初日はあっという間に終わっていった。慣れない事や分からないことは雅に教えてもらい、のらりくらりとやってきた。クラスの皆もいい人達ばかりで、馴染むのにはそう時間はかからないだろう。

奏希はスクールバックに荷物を詰めると辺りをキョロキョロ見回した。

（雅はどこにいったんだろう）

放課後、雅に軽く校内を案内してもらう予定だった奏希は、今日できた友達を目で探した。他の教室の掃除当番だと言っていたが、もう戻ってきてもいい時間のはずだ。現に、雅の班の人達はもう帰ってきている。

（探しに行ってみようかな）

校内の構造を全て覚えたわけではないが、この一日で得た記憶を頼りに奏希は廊下を歩いてみる。

途中通り過ぎる子達の声が耳にこだまし、微かに聞こえていた異物の声はそれによってかき消される。

（負の感情の声をコントロール……か。まだできそうにないな）

奏希は自分の力と向き合おうと決めていた。

このまま何もせずに負の声が聞こえ続けていたら何かと不便であろう。何より人との対話に集中できないのが難点だ。

奏希がそんなことを考えながらぶらぶらと廊下を歩いていると、だんだんと人が通り過ぎる回数が減ってきた。そして、誰の声も聞こえなくなってしまった。

そのことを少し不思議に思った奏希は足を止め、もと来た道を振り返ってみる。その先に人影は見えず、この広い廊下にいるのは奏希だけだ。

「え？　あれ？」
来てはいけないところに来てしまったのかと思った奏希は焦りをあらわにした。思考を巡らせるうちに立ち入り禁止の場に入ってしまったのかと思った。だが、奏希の後ろの方からタイルの床を踏む音が聞こえた。
奏希がそちらを向くと、一人の少女がこちらに歩み寄って来ていた。
二つに結われた髪をなびかせ、少し長めと思えるスカートをひるがえしている。
奏希は人がいることに胸を撫で下ろしたが、それはすぐに逆のものへと変わった。
背中に悪寒が走る。
頭の中で、五月蝿く警鐘が鳴った。本能が逃げろと叫んでいる。だが、思うように体は動かなかった。
「な……」
目の前にいるのは人のはずなのに、奏希の鼓動は早くなるばかりだ。
「おいおい、学校初日から厄介ごとかよ。どれだけ危ないことが好きなんだよ」
いきなり後ろから声をかけられた奏希は、肩を大仰に揺らして即座に後ろを振り向いた。
「か、炬！」
面倒くさそうに自分を見る炬を見て、奏希は恐怖の感情から苛つきの感情へと変化していった。
「いきなり声かけないでよね！　しかも後ろから！　それに厄介ごとってなによ！」
眉間にしわを寄せた奏希に炬が何かを口にしようとしたとき、誰かの声によってそれは阻まれた。
「姫さん、今すぐここから離れてください」
炬の後ろを見ると、真剣な面持ちの水野が奏希を見ていた。

訳の分からない奏希は一層眉間のしわを深くしながら二人を交互に見た。
「な、なんでよ。危ないことは何もないでしょ？　コキュートスっていう化け物は、夜にしか動けないんでしょ」
前に説明されたことを正確に言った奏希に、水野はこくりと頷いた。
「確かにコキュートスは夜以外動くことが出来ません。ただ――」
水野は奏希の奥にいる女を見て、警戒の色をにじませた。
「エリスの子は別です」
初めて聞く名前が出てきたことに、奏希は余計に混乱する。だが、この場のピリピリとした空気から察して、エリスの子というのは危険なのだということだけ認識できた。
「敵の空間が発動すると姫さんに危険が及びます。炬さん。姫さんを連れて行ってください。僕が彼女の相手をします」
淡々と発せられる言葉に、もちろん奏希はついていけない。だが炬は違う。
水野の指示を聞いた炬は納得が出来ないというように顔をしかめた。
「てめぇーが連れてけ水野。俺があいつの相手するからよ。俺は子守りが苦手なんだよ。こっちの方がしっくりくる」
拳を作り指を鳴らす炬に、奏希は怒鳴り散らした。
「子守りってなによ！　子守りって！　いつ私がそんな幼子になったて言うのよ！　むかつく！　本当にむかつく！」
上にある炬の顔を睨みつけ、奏希は煮えくり返る腹を抑えかねていた。
「！」
刹那、視界が歪み始めた。いや、景色が歪み始めたのだ。足場はしっかりとしているのに、見ているものは全て水の波紋のように波打っている。
「遅かった！」

水野がそう叫ぶと同時に、揺れる光景に色が無くなった。
モノクロの世界に身を置いた奏希は、その現象を驚愕の面持ちで見ていた。
「姫さんはここにいてください！　絶対に動いたら駄目ですよ！」
女の方に向かって走り出した水野の背を目で追いながら、奏希は返事もできずに固まっていた。
その後には炬が続き、奏希を残して走り去っていく。
意味の解らないこと続きの状態に、奏希の頭は破裂寸前だった。
「な、なんなの！　説明は！？」
奏希の声は、むなしく宙を霧散した。

第九部　記憶の中の記憶

どうして死んでしまったんだろう。
大好きだったおじいちゃん。
家族の中で、ただ一人、優しく名前を呼んでくれたおじいちゃん。
おじいちゃん。おじいちゃん。
私を一人にしないで――――。

歪んだ景色から色が失せ、白黒の二つだけが奏希の目に映る。
そして、その中で浮世離れした存在がいた。
二つ結びの少女を包むように立つ、灰色の長い髪を持った女だ。
少女の体から、この女がさなぎの皮を破る蝶のごとく出てきたのだ。
だが、その女がこの世に存在していいものではないとすぐにわかる。
白の布で体を包み、白磁の肌を少しばかりのぞかせている。そして一番異様な光景だったのは、その背に生える純白の翼だった。
とても綺麗だった。まるで天使のようだ。ただ、その端整な顔に浮かべられた笑みは、残忍そのものだった。
「わたくしと遊んでくださるのかしら。二人の騎士さん」
その言葉は奏希の数メートル前にいる炬と水野に向けられたものだった。
恐いほど透き通った女の声に、奏希は体を震わせる。
「あぁ。お望み通り遊んでやるよ」
挑発的な炬の言葉に、女は嬉しそうに笑った。
「紹介が遅れましたわ。わたくしは不和と争いの女神であるエリスの子。名はフェシカ」
そう言うと、フェシカは少女の周りをぐるぐるとまわってまとわ

りつく。
「この子の悲しみは実に心満たされるものですわ。でも、わたくし少々欲張りなので、こんなちっぽけな体から抜け出して、もっと多くの悲しみを手に入れたいんですの」
「悪趣味な女だな」
炬が吐き捨てるように言うと、フェシカはにこりと笑った。
「ですからわたくし、あなた方を始末してから巫女姫の命を喰らおうと思いますの」
フェシカは一瞬奏希の方を鋭い黄金の瞳で見てきた。
そのフェシカの言動を前に、奏希は無意識に己の肩を抱き寄せる。戦慄が体に走り、身動きがとれない。
だが、かろうじで動く口を、奏希は動かした。
「ばか炬ー！」
口から出た言葉はフェシカに向けられたものではなく、炬への罵倒の言葉だった。
「夜にしか化け物は出ないって言ったのになんなのよ！」
そんな言葉が出たのは、自分の中に占めていた恐怖を払いのけるためかもしれない。炬と水野はこの場に似合わぬ声を聞き、奏希の方に振り向いて凝視してきた。
「あらあら。巫女姫は何にも知らないんですのね」
美しい容姿に笑みを浮かべて笑うフェシカに、奏希は警戒の色を見せる。
そんな奏希を気にしていないかのように、フェシカは身を優雅に少女の後ろでうごめかせていた。
「わたくし達エリスの子は、コキュートスより力もあるし、意志も人格もしっかりあるんですのよ。夜だけ動けるという制限はありませんわ。まぁ、時々力をつけたコキュートスが人間を操って襲い掛かることがあるそうですけど、姿を見せたりすることが出来ないのでしょう？　そんなものと一緒にされては困りますわ」
それはこの前奏希を襲った赤い眼をした人間のことだ。

フェシカは体に巻かれた白布をなびかせながら天井近くまで浮かび上がった。
「さぁ、獲物はわたくしの領域に足を踏み入れましたわ。騎士さんにはかわいそうですけれど、巫女の命をいただきますわ」
フェシカの言う領域とは歪んだこの不思議な空間のことだろう。
奏希の命を狩り、この村の外に出て悲しみをもっと我が身にという願望が、フェシカの瞳を生き生きとさせている。
奏希は内心の恐れを抑え込みながらその話を理解しようとする。
この状況で説明された全てを理解しろというのは苦だ。命を狙われているというのに、のんきにそんなことを整理していられない。だが、奏希は聞いた話の一つ一つと向き合う。
「そんなちっせー頭でいろいろ考えんじゃねーよ」
その時炬のバカにしたような声が飛んできた。奏希は反射的に言い返そうとしたが、さすがにこれ以上目立った行動は出来ないと口を閉じた。
「ばか」
かわりに小さく反論はしたが。
「寝言はもう終わりか？　エリスの子。それならこっちから行くぜ？」
楽しそうに弾む炬の声が奏希の耳に届く。
目の前の敵に恐れをなしていない炬に、奏希は違和感を覚える。水野もそうだ。敵を睨みつけていて、その目に恐怖の色はない。
「つれないですのね。地上に初めて火を与えた神、プロメーテウスの子」
炬は笑うとつま先で床を二回トントンと鳴らせ、戦闘態勢に入った。
「それは俺の前の魂の持ち主のことだろ。俺はそいつじゃねぇ。俺の名前は――」
炬は床を蹴り上げ宙に浮いている相手と一気に距離を詰める。その間に一瞬にして炬の髪が赤く染まり、握った拳に炎が灯る。

「炬　潤だ」
赤く燃え上がる炬の拳がフェシカに襲い掛かる。そして、鼓膜が破れそうなほどの打撃音と炎の柱が荒ぶれる。
「！」
熱気が奏希の所まで襲ってきたので、とっさに口元を押さえる。
炬の姿は立ち上がる煙で見えない。
「ふふふ、見くびってもらっては困りますわ」
どこからかそんな声がした。それは奏希のすぐ近く。白い羽が、奏希の目の前を横切った。
「後ろががらあきですわよ。巫女姫」
奏希がフェシカに気づいて振り向いたときにはもう遅い。敵は鋭い爪を覗かせ奏希に迫り来ていた。
「！」
だが、痛みはどこにも襲ってこなかった。
目の前に見えるものは赤。揺れる赤。燃える赤。奏希を庇うように立っていたのは、炬だった。
「ぐっ」
炬の苦しそうな声が聞こえた。炬の肩を見ると血に染まったフェシカの爪が突き刺さっていた。そんな状態でも、炬は炎を作り出しフェシカに向かってそれを投げつける。
「ふふふふふ」
フェシカの笑い声が遠くなる。
たちのぼる煙は無くなり、視界が開ける。するとより鮮明に炬の肩から流れる血が目に映った。
「あっ」
奏希が言葉も出せずにそれを見ていると、後ろから声が飛んできた。
「猪突猛進すぎますよ。炬さん。少しは考えてから行動してください」
冷静な水野の声が奏希の耳に届く。

「うるせーな！　お前はその口くくってこいつと一緒に俺の武勇伝を見てればいいんだよ！」
炬に指を指された奏希は声をかけるタイミングを失った。奏希がちらりと後ろを振り返ると、水野が愛らしい顔を引き締めて立っていた。
「炬さんのいう事なんて聞きませんよ。僕は姫さんの願う事だけを実行しますから」
水野が「解」と言うと、その髪と瞳は涼しげな水色に変わっていった。
「あら、あなたもお相手してくれるのかしら？　哀れな龍の子」
今まで姿をくらませていたフェシカがたたずむ少女の背後に現れた。二つ結びの少女は、生気を失くしたように、ただそこにいるだけだ。
「その余裕。僕がつぶしてあげますよ」
水野は右手をフェシカに向けると、滑らかな動きでタクトを振るように手を揺らした。
するとフェシカの足元に水が湧きあり、その水が小さな龍となってフェシカの体の自由を奪った。それにも関わらず、フェシカの表情は焦りなどに支配されていなかった。むしろ面白そうに笑んでいる。
ぞっとする光景に、奏希は自分を抱きしめた。
「水野てめぇ！　俺の獲物に手ぇだすんじゃねぇよ！」
怒り声を荒げながら、炬が水野の元へ歩み寄っていく。
「そんな子供みたいなことを言わないでください。姫さんを守ることが最優先事項ですよ。炬さんの我がままで姫さんが怪我でもしたらどうするんですか」
火と水が相容れぬように、炬と水野も相性が良くないようだ。まさに猿と犬状態だ。
ともあれ今はこちらが有利だ。相手は身動きが出来ないし、弱めつけるなら今だろう。だが、二人はきゃんきゃんと言い合って時間

を無駄にしていっている。
「え、な、何よ」
そんな二人を見ながら、奏希はどうするべきか悩む。何とも間抜けな光景だ。
「ふふふ、危ないですわよ、巫女姫」
風の切る音は耳元でした。そして目の前には炬と水野の姿が見えた。
「って」
炬の手のひらには誰かの拳が受け止められていた。そして、その誰かの腕を掴んでいるのは水野だった。
「え、この子」
最後に奏希が見た者の姿は、先ほどまで何もせずにただ立っていた二つ結びの少女の姿だった。その目は黒く塗りつぶされ、操られているようだった。
「わたくしのおもちゃがあなたの命を狙っていますわよ」
フェシカの不気味な声が奏希の心臓の音を不規則にさせる。
殺される。
奏希はそう思った。背中に冷や汗が流れ、顔が青ざめる。
今自分がいるこの場は、命を賭けるゲーム盤の上なのだ。遊びじゃない。
再びそう思わされた奏希の体に、震えが襲う。
本当にもう、後戻りは出来ないのだ――――。

第十部　記憶の中の記憶

肌にまとわりつくどろりとした空気に、視界に広がる波紋のモノクロ風景。奏希の背には今までかいたことのない汗が流れていた。
目の前では今、激しい戦闘が繰り広げられている。相手が生身の人間だからか、かなり苦戦しているようにも見える。
ただ見ていることしか出来ない奏希は、まるで地に足を縫いつけられたように体が動かない。それは先ほど味わった恐怖からなのか、あるいは見たこともない光景に頭がついて行かないだけなのか。ただ一つ分かっていたことは、自分が無力なのだという事だけだった。
見つめているだけで何もしない。無事を祈ることしか出来ない。それがこんなにも悔しくて悲しい気持ちになるなど、奏希は知らなかった。
傷ついていく炬と水野。もう耐えられない。
奏希は力を振り絞って一歩を踏み出した。
箱を探すとか探さないとか、そんなことはどうでもいいのだ。そんなことよりも、大切なことがあるのだ。
「炬！」
いきなり目の前に飛び出してきた奏希に炬が目を剥く。炬は少女の攻撃を防ぎ水野に後を任せると、奏希を敵から遠ざけた。
「お前何やってんだよ！　死にたいのか！」
いつもより迫力のある緊迫した声が奏希の鼓膜を揺らす。それで冷静になった奏希は、確かに無鉄砲すぎたと反省した。
「ご、ごめん」
つい衝動に駆られて飛び出してしまった自分のことを心の中で叱咤した奏希は、傷だらけの炬を見つめた。
「傷、大丈夫なの？　痛くない？」
真剣な瞳で奏希が問いかけると、炬はふぅと息をつき、そっぽを

向いた。
「たいしたことねぇーよ。今までの中では軽い方だ」
それを聞き、奏希心は痛んだ。
これよりも深く痛々しい傷を負ってきたというのだろうか。この服の下に、癒えない傷跡が残っているというのだろうか。
奏希は急に悲しくなった。自分の前世がしたという約束のせいで、今も縛られ続けているのはあまりにも酷い。嫌ならこんな運命投げ出してもいいはずなのに、なぜ自分を守ろうとするのか。奏希はそれがわからなかった。
「どうして……」
?どうして私を守るの??
そう聞きたかったのに言葉が出てこなかった。代わりに出てきたのは止めどなく流れる涙だった。
「おい、何泣いてんだよ」
素気ない言葉だったが、優しさが伝わった。奏希を心配してくれているのだ。
「お前、よく泣くな」
炬は奏希の顔を自分の胸へと押し付けた。そして、荒っぽいが優しく奏希の頭を撫でた。
「次俺がお前の顔見る時には泣き止んでろよ」
半ば強制的にも聞こえる言葉だったが、これが炬なりの慰め方なのだろう。それを分かっていた奏希は、安心して炬の胸に自分を預けられていた。いつの間にか頭だけではなく体までも炬に寄りかけていた。
「にしても本当に胸ねぇな。押し付けられてもなんとも思わねぇ」
ゴスッ。
奏希の拳が炬の腹にクリーンヒットする。
「いってぇーな！　本当のこと言われたからってやつあたりはないだろ！」
ゴズッ。

次は炬の頬に拳が食い込む。だがそのどちらも本気で殴ってはいない。傷に影響が出ない程度にだ。
殴った衝動で炬から体が離れた奏希は、相手の目をじっと見た。
「なんだよ。めちゃくちゃ元気じゃねぇーか」
唇を片方だけ上げる特徴的な笑い方で、炬は奏希に言葉をかけた。いじわるそうな笑顔だが、奥底に優しさがあるのがすぐわかった。この人は、素直に優しさを表に出すのが苦手なのだろうか。でも、そんなことは考えても仕方がない。これが炬潤という人物なのだ。
「バカ」
奏希も笑って返事をする。
なんとなくだが、炬という人物を知れた気がする。宇月や雅が言っていた通り、悪い奴ではないのかもしれない。
「ぐぅ！」
悲鳴を噛みしめるような声が奏希達の耳に届いた。
咄嗟に声のした方を見ると、水野が一方的に少女にやられている姿があった。だからか、水野の術である龍達が、フェシカを縛り付ける力を弱くしていっていた。
「水野君！」
水野の元へ走り出そうとした奏希を、炬が止めた。炬は目だけで奏希を制すと自分が前へと歩み出した。
「炬……」
奏希の心配そうな声が聞こえたかのか、炬は振り向かず手を上げて言った。
「信じて待ってろ。奏希」
初めて名前を呼ばれ、頬が紅潮する。
信じて待つ。
それは奏希が出来る、唯一のこと。信じぬく戦い。強くなるというのは、ただ物理的な戦いをすればいいという事ではないのだ。
奏希は握った拳を胸にやり、真っ直ぐと前を見据えた。

第一部　涙と笑顔

白黒のみで出来上がった空間の壁に、無数のへこみが出来上がっている。床にはスリップのような跡があり、この状況の激しさを物語っている。

コンクリートが割れるような音が鳴る方を奏気が見ると、壁に拳を殴りつける形となっている二つ結びの少女を目にした。薄らと煙が上がり、彼女を包んでいる。

ぎりぎりでその攻撃を避けていた水野は、炬に目くばせをして後ろから押さえ込むように指示をした。

炬はわかってるとでも言いたそうな顔で少女に近づき後ろから少女の動きを止めた。

当然少女は炬の手から逃れようと必死にもがき暴れている。

「おい水野！　今回はあのエリスの子をお前にくれてやる！　さっさと行ってこい！」

炬は水野にそう叫ぶ。

エリスを庇うように戦っていた少女の身動きがとれない今、エリスを叩きこむのは今なのだ。

「わかっていますよ！」

水野は服に血をにじませながらも地を蹴り、宙に浮くエリスの子に向かって行った。

涼しげな水色の髪をなびかせながら、そっと何かを唱え出した。

「聖なる水は赤き花を咲かせ、咎人は地に堕ちる」

水野がすっと手を出すと、その掌に球体の水が生まれる。

その水を掲げると、水野は叫んだ。

「雨球赤（うきゅうせき）！」

その途端、柔らかそうな球体の水は先ほどまでの穏やかさとはうって変わって凶暴になり、勢い良い速度でフェシカに向かって行く。

フェシカが自らの腕を顔の近くに上げると、その目の前に炬に動

きが封じられていたはずの少女が現れた。
「！？」
水野がそれを目で確認した瞬間に水の速度は急激に落ちる。
勢いを失った水は四方八方に散らばり、宙を自由気ままにふよふよと浮き始めた。
「何してるんですか！　炬さん！」
怒りをあらわに水野が炬の方を向くと、尻餅をついたように床に倒れ込んだ炬がいた。
「お前がさっさと倒さねぇからだよ！　その女、エリスの子の力をもらって並みじゃねー力なんだよ！」
かなり頑張ったのだろう炬は、自分が悪いのではないと言い張るように怒鳴りつけた。
水野は大きなため息をついて炬から目を離すと、フェシカに目線を戻した。
すると宙に浮いていた水が、フェシカを中心にして集まり始めた。どんどんと増殖していく水はフェシカを包み込み、傍にいた少女までも閉じ込めてしまう。
風水のような球体の中に浮かんでいるフェシカと少女は、苦しそうにしている様子はない。
「なにかしら」
フェシカは危機感なくそう声を発すると、その場で手を揺らし始めた。そしてその手を次は球体の輪郭に伸ばした。
「あら」
フェシカの伸ばした手は、球体から外に突き抜けることなくぺったりと外殻をさわった。まるで透明の壁のようだ。
「あなたはもう僕の術から逃げられません」
水野がそう言った途端、フェシカの白磁の肌がカマイタチにあったかのようにいきなり切れた。
驚きに目を揺らすフェシカの目は、自分の赤い血が水の中に浮かび溶けていく様を見ていた。

それを合図にしたように、フェシカの肌に赤き花が咲いていく。
「なめられたものですわね」
フェシカは不気味に笑うと少女に目を向けた。
すると少女は拳を握り、水野が作り出した水の球体を割った。
「あら、もろい」
壊された水の球は雨のように床に降り注ぐ。
それを水野は動揺することなく見つめていた。
「わたくしはエリスの子。やすやすと殺されるような神ではないわ」
白い肌を血で濡らしながらフェシカは笑う。
だがその余裕はすぐに無となる。
「僕はあなたに負けませんよ」
途端、フェシカの肌に再び傷が出来る。今度は深く切れたのか、フェシカの顔が苦痛で歪む。対してフェシカの近くにいる少女の肌には一切の傷がない。
「くっ！　何をしましたの！　龍の子！」
フェシカの感情に反応したように少女が動きだし、水野へ向かってくる。だがそこに炬が立ちはだかり、少女の気道を逸らした。
「あなたが僕の球体の中で吸っていた水はあなたの体の中にめぐり、血に混じる。そしてその水は汚れた神を裁くかのようにはじける。これは汚れた神にしか効かない」
フェシカの血はとどまることなく増していく。
「血は生です。その血を支配されてはもう生きていることは出来ません」
冷たく鋭い瞳がフェシカをさす。
「おのれ龍の子！　その忌々しい術と共に殺して差し上げますわ！」
狼狽し、怒りを隠しきれなくなっていたフェシカが声を荒げると、それに連動したように少女の前へ進む力が強くなっていく。
少女の攻撃を受け、防戦一方だった炬が、後ろへ押され始める。
だがその勢いは一瞬であった。
「ぐっ！」

フェシカの短い喘ぎが響いた。
胸を押さえ前かがみになるフェシカの口端から一筋の血が流れた。
「血は心臓、心臓は生です……」
宙にゆうゆうと浮いていたフェシカの体が人形のように力なく落ちてきた。
黒の床に体を叩きつけたフェシカは、苦しそうな息と共に言葉を吐き出した。
「か、母様。巫女姫……の、命は、わたくし……が」
そう言うと、フェシカの体は金に煌めく砂になり、風に運ばれ飛んで行った。
それと同時に操られていた少女は、糸が切れたように崩れ、床に倒れ込み、歪んだモノクロの風景は懐かしい色のする元の状態に戻っていった。
「炬！　水野君！」
遠くで最後まで戦いを見ていた奏希が素早く二人に駆け寄った。
奏希は二人の肌に浮かぶ傷を見て、顔をしかめた。
「なによ。こんなにボロボロになっちゃって……」
二人の制服は、切れたり破れたりしていたはずなのに元通りになっており、壁の凹みや床の跡も直っていた。だが、傷は一つも癒えてはいない。
痛々しい傷跡を見て、奏希は泣きそうな瞳を隠すように眼を伏せがちにした。
「無事でよかったです。姫さん」
水野の優しげな声と言葉に余計泣きそうになるが、奏希は頭を振って涙をひたすらに止めた。今泣いたら水野に心配をかけてしまう。
「ったく。お前はなんでいつも自分から危ないことに首突っ込むんだよ。少しは考えろよな」
文句を言う炬に、奏希は言い返す気力がなかった。安心と申し訳なささが身を包んで声が思うように出ないのだ。
「姫さんになんてこと言うんですか！」

かわりに水野が奏希の代弁をする。
「俺は本当のこと言っただけだろ！」
いつものようなやり取りが戻ってきたことに嬉しさを覚える奏希は、二人の身を案じながら水野と炬に抱きついた。
「よかった。無事で……本当に」
我慢をしていたはずなのに、あっけなく瞳から涙がこぼれる。
二人の温もりを感じた奏希は余計に涙が流れた。
「ま、最後まで信じて待ってたことは褒めてやってもいいけどな」
「素直じゃないですね。……姫さん。よく頑張りましたね」
頭に置かれた二人の手が、優しく奏希を撫でる。
それはとても尊いもので、大切なんだと、今の奏希には痛いほどわかった。
「だけどまだ終わりじゃないですよ」
水野が少し緊張した声で言ったので、奏希は涙にぬれた顔を上げた。
「この人が負の感情を持ち続ける限り、エリスの子達はまた付け込みます」
奏希は近くに倒れている少女を見た。
彼女の瞳からは一筋の涙が流れていた。悲しみに溺れているような、そんな表情だ。
「人が強くならなければ、また同じことの繰り返しなんです」
その言葉が、奏希の耳朶に響く。
まるで、自分に言われているような気がしたのだ。悲しみを超えて強くなれ、と。
「強く……」
奏希はその言葉を自分に言い聞かせるように繰り返すと、窓の外に浮かぶ穏やかな夕日を見つめた。
人は弱い。だが、強くもなれる。弱いままでいるか、強い人間になるかは、自分次第なのだ――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6645p/

パンドラの箱～儚い記憶と契約の騎士（ナイト）～

2011年11月16日03時22分発行